
魔王様は憂鬱だ！！！！

居ぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様は憂鬱だ!!!

【Nコード】

N3563M

【作者名】

居ぬ

【あらすじ】

タイトル変更しました。

魔王城に魔王討伐にやって来た一人の勇者。しかし、この勇者……魔王を倒す気全く無し。揚句の果てに、あるうことが魔王に養ってもらう始末。

おまけに部下達は何故か勇者に何故か懐いてるし……

一体お前は何しに……

……へ？クツキーのおかわり？全員分？

何？ゲームで遊ばないかだと？

お前なあ……もう

……勇者なんか辞めちまえええええ！！！！

1、グッナイスリーブ（前書き）

文章を書くのが半端無く苦手な僕ですが果して最後まで書けるのか

……

長くはしない予定ですが生暖かく見守って頂ければ光栄です。

1、ゲツナイスリーブ

ここはとある世界の魔王城、

……闇霧漂う暗黒の城の、その深層部に
薄ら暗い魔神の祭壇が存在した。

そして、その祭壇の前に存在する玉座に座る黒く長い髪に紅眼の青年風の人物、

この人物こそが魔王、魔族を統べる魔の王であり悪の権化、人間の倒すべき敵だ

魔王は踏ん返り返り彼の人物が来るのを待っていた。

(来たか)

重い扉の開く音が部屋を響き

黄金に輝く剣を片手に銀の鎧に身を包んだ騎士が部屋の大扉を開け
放ち、中へと入って来た。

騎士は、玉座から見下ろす魔王をハッキリと見据える。

「ふふふ……勇者よ……よくぞ来た………歓迎するぞー!!」

魔王は勇者が入ってきたのを確認すると
手を広げ立ち上がり勇者を盛大に迎えた。

古くから歴史の中で幾度と無く繰り返されてきた宿命の対決
今ここに、魔王と勇者が対峙した。

「……………」

「俺を倒すために……今までお前のような勇者は何人もやって来た、
しかし誰一人としてこの俺に剣の届いた奴は居ない……」

魔王は、世界を統べる力を持つ自らの力に酔いしれながら高らかに
述べ上げた。

「果してお前に俺が倒せるか？」

挑発的な笑みを浮かべ勇者の攻撃を誘う
多くの勇者はここで勇猛なセリフを吐き出し、魔王の力に幾度とな
く返り討ちにされてきた。

（果してコイツはどう出るか……）

魔王は自分の勝利を確信しており、何があろうと対処する自信を持
っていた。

勇者の苦悶の表情を想像してニヤリと口を歪める。

（さあ、何処からでもかかって来い！！）

しかし、勇者の口から出た言葉は誰しもが想像だにしない魔王の予
想を完全に裏切るものだった

「……………眠い…」

「……………は？」

訳も解らず硬直する魔王

目の前のその勇者は、そう言うと、もう興味ないとばかりに魔王から視線を外し、兜を面倒臭そうに脱ぎ捨て、その寝ぼけたやる気の無い顔と、汚れかかった灰色の髪を曝し
自分の周りに簡易的な結界を張り巡らせ

……………どこから取り出したのか……………とてもフカフカで気持ち良さそう
なクッションを枕に横になり

「……………お休み……………」

あるところかその勇者は倒すべき魔王の目の前で魔王に大した関心を示す事も無く爆睡し始め。

……………間の抜けた顔をした魔王が一人、立ち尽くしたまま、その部屋に取り残された。

2、魔王様はお怒りのようです

「おい……」

声をかけるが既に勇者は夢の世界に旅立っていた

思わず額に青筋が走る……

ふふふ、あなたが初めてですよ、僕をここまで怒らせたおバカさんはあ……！！！！

などと某ドラゴンのようなボールの物語の冷蔵庫的悪役のセリフを頭に浮かべながら

魔王は右手に魔力を集めた。

並の魔術師百人分はあろうかという魔力が収束され弱く黒い光が放っている。

「魔王を馬鹿にした罪……その身で償ええ！！」

魔王が魔力を放ち

黒い光線が勇者の張った結界へと一直線に向かい、結界を突き抜け、勇者の息の根を止め……

……る事はなく鏡に放たれた光のように反射して物凄いスピードで魔王の顔の真横を通り過ぎ、背後の祭壇を破壊した。

「……………」

普通、個人の張る簡易結界は低級魔法を数十発防ぐ強度しかないハズなんですけど……と

「ふ、どうやら俺はお前の事を甘く見すぎていたようだ………しかし、次は無い!!」

魔王は、そんな事を言い放つが

当然の如く熟睡している勇者は全く聞いてない祭壇の間に魔王の独り言が虚しく響いた。

「……………」

気を取り直して再び手に魔力を込める量を先程の二倍に……

「突貫せよ」

ただ単に魔力を放つのではなく短い詠唱によって魔力に特性を与え、

「……………今度こそ死ねえ!!」

魔王の魔力が再び勇者に襲い掛かる。

今度は跳ね返される事もなく、結界を破壊せんとガリガリ音を立てながら直進しようとする!!

……………しかし一分程ガリガリした後、力尽きたように、ぷしゅーと間の抜けた音を立てて霧散してしまった。因みに結界には傷一つ付いていない。

「……………」

三度魔力を手に込める、
今度の魔力は
今までに無い収束を見せ黒い光が辺りに充満し、唸りを上げる。

「漆黒の星よ……………総ての理を断つ力を我に……………」

久しく使っていなかった魔術の詠唱を行う目の前に展開するのは巨大な魔法陣

「メテオライトプラストオオ!!!!!!」

魔法陣から太い闇が放たれた。

闇は容赦無く結界ごと勇者を飲み込む

凄まじい轟音の後……………」

残されたのは大きく穴の空いた城に……………」

全く無傷の結界に守られた勇者……………」

「もお……………食べ切れないお……………」

幸せそうに寝言を言っている

「……………っ~~~~っ~~~~!!」

その日

最早完全に切れた魔王はなりふり構わず魔法を連射を始め……………
日がどっぴりと暮れて勇者が起きる頃には魔力の尽きるまで力を使
い果たし

完全にくたびれていた。

2、魔王様はお怒りのようです(後書き)

中二病が入ってるし、文章もめちゃくちゃですが、之が俺の精一杯
さー！

3、勇者はお腹が空いたようです

「うん……」

日もどつぷり暮れた夕方頃、勇者は目を擦りながら起きた。

「……………あれ？」

勇者はいつの間にか穴だらけになった部屋を見渡し、何故かに横たわっていた魔王を揺り起こす。

「……………は……………!!」

勇者に揺り起こされ

くたびれた雰囲気を出しながらも魔王は“バツ”と直ぐさま立ち上がり、体制を整えた。

「くく、やっと結界から出てきたか!!この時を待っていた!!今度こそお前に引導を渡してやる……………!!」

魔王っぽいセリフを吐き出し、身体に残っているありったけの魔力をかき集める

「死ねえ!!」

プスン

しかし先程の城が半壊するほどの攻撃で魔力の殆どを使い果たしていた魔王の手からは……………
エンストした車のエンジンをかけたみたく空気が抜けるような音が
発せられ

放たれた魔力は勇者の前髪を軽く靡かせる程度に終わった。

「……………」

「……………」

「えい」

パソコン

「うぎぎやあああ……！！！！！！！！！！」

まるでやる気の無い掛け声と共に手に持っていた剣で魔王の頭を軽く叩くと

見た目からは全く想像出来ない凄まじい魔力が剣から流れ込み（体に悪そうな感じの）

魔王は5分間程悶絶した後、パタリとその場に倒れ込んだ……

まおうはゆうしやにはいぼくした。

宿命（？）の対決は勇者の一方的な展開で呆気なく幕を閉じた。
そして、勇者は倒れた魔王の側に寄り止めを刺すものかと思われたが。

グーッ……

「腹減った」

「……………」

勇者は腹の音を鳴らして魔王に食事を所望した。

「だ…誰が……………」

ズゴン！！

顔の真横に剣が突き立てられた。

魔王はすごすごと食事所へ案内する……

「？調理師は何処だ……………」

見るも無残に崩壊し、辛うじて形を保っている城内を歩き回り

(勇者が暴れ回ったからではなく主な原因は魔王の勇者への攻撃……)

部屋の半分が崩壊した食事所に到着した魔王はここに居るはずの魔物を探した。

「あのゲテモノ作ってたの……………」

……………どうやら勇者は魔王に会う前、一度ここに来たらしいゲテモノとは失礼な

……まあ……リザードの丸焼きやスライムの肝なんて人間から見たら
気持ち悪くて食えたもんで無いのだろうか
魔王は一応肯定の意を示す。

「……………」

クイツ

勇者の指差した先に調理師であろう物体が、先程の魔王の無差別攻撃で真っ黒焦げになって転がっていた。

あー

……これでは食事を作る事が出来ないと魔王は頭を抱えた。

……調理と言ってもこここの食事は食材を切り分けて適当に焼いた
ようなものばかりで技術なんぞ必要無いのだが……
他の魔物に任せようにも城の中の魔物の大半が使える状態ではない。
……理由は言わずもがな……だ

今夜の食事はどうするかと悩んでいるところに

勇者の鶴の一声

「……………腹減った」

発した言葉はそれだけだが何故か魔王は勇者の言いたい事が判った
目とかオーラが無言で語っている

……………お前が作れと

魔王に料理を作らせる気か？！

何処の世界に魔王に飯を作らせる馬鹿がいるんだと勇者の顔を見るが

「……………」

金の剣を片手に物凄く魔王の事を見つめる勇者

「ちっ」

作れば良いんだろ作れば

仕方が無いから、この銀河よりも広い心と慈悲を持つ俺が作ってやるよ……！！

……………決して勇者が恐いとかではなく

4、魔王様は料理上手

オムライスに鶏のスープ、新鮮野菜のサラダ……デザートにイチゴのシャーベット

「ふう……」

「……………」

机の上に、マトモ………ってか寧ろ随分と立派な食事が用意されていた
思った以上の食事に
あまり表情を変えない勇者も思わず目を白黒させる

さて、俺も食うかと

調理室から魔王はエプロン（花柄）を外し勇者の向かい側に座った

「?…どうした、食わないのか」

なかなか食事に手を付けない勇者に食事を促す。

「……………いただきます」

恐る恐る口に入れ

「……………ウマイ」

満足げに頷き口を進めた

美味そうに食事をする勇者を見て

魔王はその顔を観察する

目の前の食事に集中し黙認と食べ続ける、間の抜けたやる気の無い顔が目映る

端から見たら之が勇者であるなんて誰が想像しようか

なんでこんなのに負けたのだろうか……

魔王はガツクリと凹んだ

「……ごちそうさま」

数十分後、食事に毒でも盛っておけば良かった……あ、でもそれじゃあ食事が……と後悔したり葛藤したりしたのは秘密である

4、魔王様は料理上手（後書き）

短っ！！書いたら思った以上に短くなってしまった……、今日中に
もう一話投稿するかも

5、睡眠は大事だそうです

食後、魔王は半壊した城の被害状況を見るために城の中を歩き回る事にした。

しかし……

「何故ついて来る……」

「……………」

……………無視かよ

食事所を出てから……

何故か勇者は魔王の後ろを金魚の糞のようについて来る

どうやら魔王を倒すつもりは無いらしい

しかし、負けた魔王からしたら常に勇者に監視されているようで、あまり愉快なものではない

後ろの視線が気になって仕方が無い魔王

「用事が無いならとっとと家に帰れ」

「……………家まで遠いのな」

「じゃあ、その辺りで寝てろ」

「……………床が冷たいから嫌」

「……………」

もう嫌……………この勇者、ホント何しに来たんだよ――

城の半分を見回ったところで恐らくもう3時半、城内の手下をあら
かた回収し（上位の魔物を除き城の手下の殆どが魔王の分身である）
、勇者は眠さに目をウトウトさせながらも未だ魔王の後ろについて
来る。

「……………」

「……………もう好きにしろ……」

流石に魔力を使い切った後に（今は多少回復しているが）城内を歩
き回り、疲れてへとへと魔王は寝室に向かう

部下達への報告は明日で良いか……

なんて思っているうちに寝室前に到着、寝室の扉を開き、ベッドに
向かおうとするが……………

とてとてとて……………バフッ

扉の横を駆けぬけ

我先にと言わんばかりに何か銀色の物体がベッドの上につき込んで

いった

何が起こったか解らずポケーっと突っ立つ魔王だったが……
ポウツと

薄く明かりが燈った

「……………んなあ!!??」

見れば魔王のベッドの上で至福の顔で横たわる勇者

「……………フカフカ」

結界が辺りを照らしている……

「ふっふざけるなあ!!!!」

即座にベッドから引きずり下ろそうとするも無駄な努力に終わり

結局その夜……

魔王はソファ行きを余儀なくされた。

5、睡眠は大事だそうです（後書き）

クオリティは書いているうちに上がる……かな

6、魔王様は苦勞人

.....

魔王はソファで目覚めた

魔力や体力はまあまあ回復したが寝起きは最悪、

元凶である勇者は未だ魔王のベッドを独占している

間だ成人していないらしく、妙に幼い寝顔が憎らしい。

どうやって、この勇者を排除するかと考えている所に廊下の方からどたとたと足音が近づいて来る
なんだ

「魔王様！！ご無事ですか?!」

慌てた顔をした宰相がやって来た
今朝になって、穴だらけの城を確認し、心配して急いでやって来たらしい

「少し派手に戦闘をしたが勇者は倒した、安心しろ」

大嘘だが

「そうでしたか……」

「安心した様子で息をつくが、何か変なものを見る様な目が

「して……その人間は……？」

しかめつつらの部下に促されて見てみれば

いつの間にもやら魔王の隣に目覚めた勇者が来ていた

ちよ…おま、さっき寝てただろ！！

~~~~こんの都合の悪い時に出てくるな！！

「あー……コイツは……」

まさか勇者だと言う訳にもいくまい

勇者を見れば……どうにか上手くごまかせとアイコンタクトを送って来る

無茶言っな……

……そもそもお前が出てこなければ無問題だった

とは言え下手に返答して部下がこの勇者に殺られるのも不本意だ……

(コイツならやりかねない)

さてどうしたものか……と考える

取り敢えず……

「……コイツは勇者に憧れて、この城にやって来た人間だ……しかし俺の圧倒的な力に見惚れて俺の下に就きたいと懇願してきたのだ……直ぐに排除しても良かったが、まあ生かしておくのも一興かな」

よくもまあ、そんな口から出まかせがスラスラとでるなど、我ながら感心してしまう」

「……な、しかし魔王様……人間なんぞ手元に置いてもしもの事があれば……」

ふふふ、愚問だなと魔王は不敵に笑ってみせた

「案ずる事はない、所詮は人間、例え刃向かってきたとして俺が負ける道理が無いだろ」

オスカー賞ものの演技に宰相も成る程と頷く

「はは……それもそうでした……」

………実は思いつきり負けましたけどね

と、宰相は勇者を見て訝しげに呟く

「人間、せいぜい戯れが終わるまで魔王様の機嫌を損ねぬように……な」

実は、こっちの方が脅されてるなどとは口が裂けても言えない

「では私は残した仕事があるので……」

そう言っつて宰相は城の隣にある院に帰っていった

ど……どうにか、ごまかしきれた……

ゲシッ

「痛っ!!」

突然足に痛みが走る

見れば勇者が足をゲシゲシ踏んでる

「……………あいつ、嫌いな」

だからって何故足を踏む

「……………あと、誰が下僕」

「一言も言っつて無え!!」

てか、確かに同じ様なことを言っつたが……じゃあどうしろと!!

そして、極めつけ

足を踏むのに飽きたのか自分の足を魔王の足の上から退け  
今度は魔王の袖を引っ張り廊下を指差す

「……………朝ごはん」

俺は給仕係か！！？？

## 6、魔王様は苦勞人（後書き）

さて、先の展開全く考えて無いぜ……どうしよう

## 7、愉快的部下達

調理室にベーコンと卵の香ばしい匂いが立ち込める

本日の朝食は簡易的なパンに、ベーコンエッグと野菜スープ

勇者は椅子に座り

既に黙認と食べている

「……………つま」

その様子を見て呆れながら座る魔王

「ふう」

今日昨日のように料理を作るのは何時ぶりだろうかと感慨に耽りながら食事を始める、勇者に半ば無理矢理作らされてる感じは有るが、実は料理を作るのは嫌いではない。寧ろ好きなのだが  
普段は魔王つばく無いと自重しているだけだ。

つてか、この勇者はいつまで此処に居るんだろうか……………

まさかこのまま居座るなんて事、無いよなと早くこの城から追い出す方法を考え頭を悩ます。

「……………あれ」

今更になって何かが頭に突っ掛かる感じがした

何か重大な事を忘れているような……………

魔王は必死に思い出そうと頭の中を掻き出すが全然思い出せない……  
……  
面倒になり、考えを放棄し始めた頃

「……あーなんか良い匂い……魔王様おはよう……ございませ……  
つて、ああああ……！」

「……全く今回の勇者は……なんなのさ……何驚いて……ぎゃあああ  
……！」

「……どうしたんで……ひいいい……！」

「……なっなんで勇者が此処に居るんですか……！」

三人が声を揃えて叫ぶ

この三人が居ることを忘れていた……

この城の中の数少ない腹心達を……



## 7、愉快的部下達（後書き）

いきなりネタ切れで新キャラ登場、文も短いし、グダグダだあ！！  
！

8、魔王様は部下に恵まれないようです

マンテイク

獅子の身体と翼を持つ誇り高き獣人

雷と風を司る魔物

ラプラサス

透明に透き通る肌を持つ人魚

氷と水を司る魔物

ファフニール

ワームを纏い操る鈍重なる巨人

炎と土を司る魔物

城を守る二人は当然の事ながら魔王にたどり着く前に戦っており

一度会っているが故に普通の人間だというごまかしが利かない

勇者との間に緊張が走り……

そして……

美味しそうな食事の中に異彩を放つ食材が……

「……………それ……………？」

“小柄”な少女の姿をしたファフニールが食べてる緑色のドロドロしたゲテモノを指差す。

「スライムの塩漬ですけど、食べます？」  
ファフニールが勇者に勧める

「……うーん……」

見た目が見た目だけに躊躇う勇者に

「見た目はアレだけど意外とイケるわよ」  
“褐色肌”の勝ち気なお姉さんのラプラサスも勧め

「モノは試しただ食ってみるよ」

なんか随分”チャラチャラ”した格好のマントイークも後を押す

「……………」

なんだか楽しそうにワイワイと喋っているなーと魔王はその様子を  
見ていた。

……………  
……っつか

……………  
……なんか、仲良くなってるし……………

「魔王様おかわりお願いッス」

「おい」

さりげなく魔王におかわりを要求する部下に思わず声が出た。

「?何かまずかったツスか?」

いや、自分の主に食事を作らせるなよとか、いろいろあるが。取り  
敢えず

「……何故、仲良くなってる」

勇者相手に戦闘体制を崩して無防備な人間体になるなんて気を許し  
すぎだ

「はは、昨日の敵は今日の友って言うじゃないですか」

オレは気にしませんよと

なんの事もなさそうげに言う

いや……それ逆だし

隣でスライムの塩漬を食べて新発見と言わんばかりに「おお」

と叫んでる人物は曲がりなりにも魔物の倒すべき敵、勇者なのだから

あまり仲良くなられても困るんですが

と魔王は懸念するのだが

「頭の固い宰相さんはどうかごまかしたんなら無問題っしょ」

いや、問題だらけだから……

主に俺の身の安全的に、あと体裁的に

目でうー……と睨みその趣旨を伝えようとするが……

「どうしたんスか、そんなしかめっ顔して」

「はいい！！伝わってない！！」

そしてマンテイクは今まで勇者と絡んでいた二人に間違ってるであらう旨を伝えると

「電気落とされた時は怖かったけどいい人なのに」

「こんな可愛い子を追い出すの？」

「……………」

少し顔を赤らめた勇者を挟んで文句を言ってくる  
ファフニールはわかったと言わんばかりに頷き、

「きつと、魔王様は勇者さんが人気者の座を取られるのが嫌なんですよ」

なんかとんでもない事を言い出したよこの子！！

「……………そなの？」

「ちがっ」

「魔王様つたら素直じゃないのね、かわいい！！」

勇者の質問に否定する間もなく、後ろから抱き着いてくるラプラス

普段から癖のある部下だとは思っていたが……自由過ぎるだろこの部下達

改めて思う……

何なの……「いっしょ

そして心の中で叫ぶ

もう嫌ああ！……！！……！！

魔王の苦悩は続く

8、魔王様は部下に恵まれないようです(後書き)

勇者の出番が減ってるような気がするけど気にしない!!

## 9、チェスで勝負だそうです

魔王とは読んで字の如く魔の王であり

そんな王である魔王には日々の執務が存在する

魔王が執務室で仕事をしている間

勇者含む他四人は部屋の隅で複数人対戦でもできる魔界チェスに励んでいる

「……………えい」

「あー、私の王様が！！」

ワイワイ騒いでて五月蠅い事この上ない

「他でやってくれないか？」

魔王が出ていけと仄めかすが

えー、それじゃあ魔王様が一人で可哀相だよと声を上げる部下達

そんな事気にしなくていいからどこか行ってくれ、仕事の邪魔なんだと魔王は言うのだが全く解ったそぶりを見せない

……………いや、邪魔だと解っててやっているのだろう

「魔王様も勇者さんとやります？」

「やらん」



書類に向き直り紙面上に筆を走らせ、こっちは仕事で忙しいの、と意思表示をする

「……負けるのが怖いんだ？」

「そうなんですか？」

「チキンツスねチキン」

プチッ

仕事は大事ですが

そこまで言われたら魔王としても黙っていられない

「おい！！勇者！！」

勇者に指さして叫ぶ

「俺と勝負だ！！」

「…………おー」

---

魔界チェスは32個の駒を交互に2個ずつ動かす、敵の王を先に取った方が勝ちという巨大版チェスともいうべき代物だ

しかし、騙し討ちも作戦の一つと考えられるため王手をかけるたびに  
一々相手に教えなくとも良い  
相手の目を欺き、いかに相手の王を勝ち取るかというのがこのゲー  
ムの勝敗を分ける鍵だ

「……ん」

先手である勇者が、まず一つ駒を進める

次に魔王、

盤上の駒が瞬く間に散開していく

……実はこの勇者と魔王とはある賭けをしていた。

もし、勇者が勝てば魔王は勇者専属の調理師になる

魔王が勝てば勇者は今すぐこの城を発ち二度と戻って来ない

後ろの三人は『魔王様負けろ』とか不敬な事この上無いことをブー  
ブー言っているがこのさい完全に無視する。

この勝負、魔王としては何としても勝ちたい。

それ故に魔王は魔界チェス初心者であろう勇者に全身全霊を賭けて  
勝負に出た。

……大人気ないなどと言つてはいけない

勝負序盤、

張り切つて勝負に出た割に魔王の駒は勇者の駒により少しずつ削ら  
れていく

……一見勇者優勢に見えるが

取られている駒は雑魚ばかり、

「ふふふ」

不敵な笑みを浮かべる魔王

明らかに相手の策に嵌まっているのは分かったが  
初心者である勇者には魔王の狙いが何なのかサッパリ分からず手の  
うちようがない

そして、余計な駒があらかた無くなったところで

魔王の反撃が始まった

自陣のポーンが殆ど無くなり身動きがとりやすくなった魔王の駒は  
勇者の陣地に入り込み、使える駒を次々に奪っていく

一方勇者は、自分の駒が行く先々を妨害し身動きが取れない

そう、先程大量に取られていた駒はこのための布石

「……………」

一気に劣勢に持ち掛けられる勇者は唸りを上げる

次々に魔王の手に堕ちる駒達、もう既に勇者の手元には使える駒が  
殆ど無い

手元に在るのはルーク二つにビショップ、ナイトがそれぞれ一つ  
あとは全てポーン等の雑魚ばかり

「さあ、トドメだ」

最後の仕上げだとばかりに

勇者の王を追い詰める

絶体絶命の勇者、

もう既に勝った気でいる魔王だが

……しかし、ふと勇者は気づく

それまで王を守っていたビショップもどきを動かす……駒が無くなりほぼ空き地となった盤上を横切り  
魔王の……王の駒を取った。

……あ、

と思ったが後の祭

「ん……………んな……………」

……馬鹿な!!という声も出せず

呆然と立ち尽くす魔王に

「……………詰めが甘いのな」

勇者のトドメの一言

攻撃に転じ過ぎて守りを疎かにしてしまった魔王、  
例によってまた呆気ない勝負の幕引きとなった。

部下達は『流石は勇者』なんて囁し立てるし、何？俺虐められてる？と負けたショックと部下からの待遇に涙を流すのだった

その後

20回に及ぶ勝負は尽く魔王の敗北に終わり  
賭けに則って

勇者の命令により泣きながらクツキを焼く魔王の姿が見られたとか。

その日の執務は結局次の日に繰り越された。

## 9、チエスで勝負だそうです（後書き）

更新が遅れたあ！！って見てる人なんか殆ど居ないけど………これからも毎日ゆるゆると更新します。

## 10、魔王様は疑問に思ったようです

闇霧漂う暗黒の城のその深層部に存在する薄ら暗い魔神の祭壇

そこで魔王は踏ん返り返り彼の人物が来るのを待っていた。

（はあっ……来たか）

白く輝く剣を両手に龍の革で作られた鎧に身を包んだ騎士が部屋の扉を開け放ち、中へと入って来た

「……勇者よ、よくぞきた歓迎するぞ」

歴史の中で幾度と無く繰り返されてきた宿命の対決  
今ここに、魔王と勇者が対峙した。

「……………」

「今までお前のような勇者は今まで何人もやって来た、しかし、この俺に剣の届いた奴は……………一人しか居ない……………」

何となく、自信も迫力も感じない台詞だが、どうにか威圧感だけは保っている

「……………果してお前に俺が倒せるか…？」

魔王は玉座から勇者を見下ろして問う

「……なら、俺はその二人目の男になり、お前を倒す!!」

そんな魔王のテンションにも気づかず

勇ましい言葉を吐き剣を構え、聖なる呪文を唱える

「魔王!! 覚悟!!」

聖剣が輝きを増し部屋に光が充満する

そして、全身の力を込めて光り輝くそれを魔王に叩きつける

「……………ふ」

しかし、魔王はその勇者の必殺とも言える一撃を……………指一本で受け止めた

「な」

驚愕に顔を歪ませる勇者

だが驚愕はそれに止まらない

魔王の魔力により砂塵と化する聖剣

「そん……………な」

魔王は片手で勇者を掃う

間を置かず繰り出される魔王の攻撃

最大の攻撃も効かず、武器を失った勇者は反撃する術も防御する隙も与えられず魔王の技に蹂躪され力尽き、床にはいつくばる

あまりに一方的な戦い



そこには歴然とした圧倒的力の差が存在した。

最早、反撃する気力も意識も無くなった勇者にトドメの一撃を刺さんと魔王は手に魔力を込める

……死ね！

パソコン

「イツ、……！！！」

マヌケた音と共に突如として頭を襲う激痛に声を上げる事もできず目を見開いて頭を抱える

痛みに涙を堪えながら振り返れば勇者が金の剣を片手にコチラを見ていた。

「……殺すのはダメな」

実は前日に新たな勇者が来ると聞いて  
勇者は魔王、その他三人に殺さないように頼んでいた。

確かに勇者にとって、他の人間が殺されるのは嫌だろうし、断る理由が無いと三人は快く二つ返事で了承し

魔王は……と言うと脅されながらも、しぶしぶ了承……する振りをした

……別に魔王にとって勇者を生かすのも殺すのもどっちでも良いのだが

この勇者に命令されているようで何となく納得のいかない魔王は忘れたふりをして殺ってしまおうなどと考えていたのだ  
……結局、様子を見ていた勇者に止められ未遂に終了

しかし……

御丁寧にロープでがんじがらめにし、さるぐつわを噛ませた（何か恨みでもあるのかってぐらいに）先程の勇者を、転送術で近くの人間の村に送り返したこの勇者に思う

「同じ勇者がやられるのを黙って見ているのもどうかと思っぞぞ」

コテンパンにした本人が言うのもなんだが

「……………そうか？」

あまりの使命感の無さに本当にコイツは勇者なのかと魔王は疑問に思ってしまう

この勇者がこんな性格だからこそ、今のところ自分が殺されることなく生きているのだが

だからこそ物凄く複雑な気分になる

ってか何で自分を国に引き渡さないのか？

自分を引き渡せばどの国でも一生遊んで暮らしていける程の金額が  
手に入るハズ……

しかし、目の前の勇者はそれをしない

「何で俺を引き渡さないんだ？」

思い切って勇者に質問した。

すると、勇者は面倒臭そうに振り返り  
こう聞き返してきた。

「……………そうして欲しいの…？か？」

「そんな訳無いが……………」

「……………ならしない」

それっきりその話は打ち切られた、  
相手が嫌がるからやらない、  
単純明確な理由、  
それが例え魔族だとしても

「……………腹減った」

軽食を所望する勇者に…………

……何でコイツが勇者なんだろう

魔王は思った。

## 11、勇者は動揺したようです

「王国の双子の王子、王女が行方不明……ねえ……」

朝、魔王はコーヒーを飲みながら机に広げた新聞を読み呟いた。月に二度発行される王宮ご用達の新聞。数日前、緊急に増刷されたと聞いて手下を使い取り寄せたのだ

「何か不満でもあつたんですかね？」

とファフニールは沼ガエルの目玉を頬張りながら言った  
因みにマンテイクは昨夜に飲みすぎてベッドの上、ラプラサスは朝の行水、もとい水汲みに行つてこの場には居ない

「さあな、俺も魔王だが、人間の王族の事なんかサツパリだ」

しかし、少しは解るような気がする

上に立つ者は多かれ少なかれ、プライドやら体裁やら、様々なプレッシャーに苛まれる、この双子はそれに堪えられなかったのだろう

……何にしてもコチラには関係無いか、と魔王は新聞を閉じた

「……………」ちそうさま」

食事を終わると同時に机を立ち扉に向かう勇者

「あれ、どこ行くんですか？」

「……………」さんぽ」

「じゃあ、終わったら魔法の続きを教えてくださいね」

いつの間にそんなもん教えてたんだ、という魔王のツッコミは完全にスルーして

了解、と手を挙げて勇者は部屋を出て行った

---

――暫く後、

「うはあ……………」まだクラクラする」

二日酔いでフラフラしたマンティークは城内をうろつろしていた。

昨晚

魔王の倉庫で年代物の古酒を見つけたマンティークは魔王に『要ら

ないからお前にやる』と言われ一人酒盛りをしていた  
しかし、調子に乗って飲み過ぎたのが災いして  
今朝になって頭がズキズキと痛みだし今の今までベッドから起きら  
れなかったのだ

また倉庫で薬でも貰うかと重い足をズルズル引きずっていたところ  
見知った顔が辺りを気にしながら中庭に入っていくのを発見

見つかって無い事を良い事に後を追って窓から様子を見ることにし  
た。

見ると勇者が地面に線を引き探索の法陣を書いている

対象の身体の一部例えば髪の毛等を媒体に法陣に対する対象の位置  
とその詳しい挙動を知ることが出来る魔法陣だ

ただし、対象との距離が遠い程、多くの魔力を消費し精度が落ちる  
ので大抵の魔術師は半径数百メートル範囲内ではしか使う事ができな  
い、  
また、相手が隠蔽をかけている場合、相手を捕捉できず術は発動し  
ない

最も前者は、勇者の魔力を以つてすれば  
いくらでも広い範囲を索敵出来るのだろうか

「……………」

マンティークはこっそりと感覚共有して  
その探索対象を覗かせて貰うことにした

視界が山を越え野を越え湖を越え村を越え、更にまた山を越え

森の中に、銀色の滑らかな髪を持ち赤い鎧を纏った人物が木を背もたれに寝ているのを見た、

……恐らく上流階級の人間なのか身につけているものはどれも一級品で森の中に居るといふのに異常なほど、汚れが見当たらない  
まるでそこだけが異世界に切り取られたように……

マンテイクは背中に悪寒が走るのを感じた

術の行使は一方通行で本来向こうからこっち側を見ることはできない  
しかし、その人物は突然、碧眼を見開き  
明らかに“コチラ”を向いて呟いた

『見つけた』

「……………！！！」

慌てて術を置く勇者と盗み見していたマンテイク

術を置んだ勇者は平常を装うがどこことなく顔が青いようにも見える。

「……………うっ……やばい」

普段感情を殆ど表に出さない勇者だが



相当つるたえているのが一目で解る

あちらこちらに行ったり来たりして完全に挙動不審である

急に思い立ったように動きを止め

勇者は手に魔力を込めて自分の分身となる白い鳩を作り出した。

勇者と同じ魔力を放つそれは恐らく囷か…

……………その分身を空に開け放ち

「……………これで大丈夫……………か？」

しかし、それでも安心出来ない勇者は  
合掌して必死に祈る

「……………うう……………」

どうかお願いします、囷に釣られて下さい、こっちに来ないで下さい、

と無言で必死に祈る

それらの一部始終を眺めて

勇者つちもなんだが大変だねえ……………

恐らく勇者の親戚か兄弟であろうと思われるあの騎士、

術の行使を察知して逆探知をしたのを見て、心臓が爆発するくらい  
驚いたが

主である魔王をアツサリ倒した勇者の血縁者ならと妙に納得出来た  
魔王に報告するべかきかとも思ったが  
勇者も相当参ってるようだし来るべき時が来てからで良いかと心の  
中に仕舞う

余計な詮索をするつもりは無い

触らぬ神に祟り無しってね

不謹慎ながらも、あれ程感情を表にだした珍しい勇者を見られて得  
した気分のマンテークは

「……………それよりも酔い止め……………」

酔い止めを探しに倉庫の中に入って行くのだった。

11、勇者は動揺したようです（後書き）

— 波乱起こる……か？

## 12、部下が秘密を探っているようです

昨日一日、散歩から帰ってきてから妙に落ち着きが無く不審がられた勇者だが、今朝にはいつもの調子に戻っていた。

いつも無表情でいるのに、下手に表情を出しているところがちが不安になるもの

事情を知らない魔王他はいつも通りの様子に戻った勇者を見てホッと息を吐く

やはり勇者は勇者らしく(?)寝ぼけた顔で飯を食って自由に振る舞っているのが一番だ

……なんだか、この勇者を見ていると体裁とかそういうものがどうでも良くなってくる

少し……羨ましいな

と魔王はそんな事を思った

「……………あれ？」

急に勇者が何かに気づいたように声を上げた

「……………魔王縮んだ？」



追尾用の使い魔を放ったラプラスが意地悪げに顔を歪めた。

「？」

「魔王様があそこまで動揺する事なんてきつと乙女も恥じらうような秘密があるに違いないわ!!」

何が何でもこの目で確かめなければ気が済まない

「あー俺はパスス、人の秘密探るのは趣味じゃないんで」

マンテークは早々に辞退した、

「ノリが悪いですね」

後からやっぱり行けばよかったと後悔しても知りませんよと  
ファフニールはどうやら行く気満々だ  
勇者も最初の方こそ『いいのかなあ』と後ろめたい事を言っていた  
が二人のテンションに乗せられ結局ついていくことになった。

「じゃあ、魔王様の秘密の部屋に向かって出発!!」

「てらー」

とマンティークに送られ一同は魔王の後を追った。

鍵の付いた扉にたどり着いた。

「あー、鍵が閉まってますね」

隙間から中を伺つと魔王の姿は見当たらない  
すると、前もって準備したピッキング用の針金で迷うことなく鍵を  
開くラプラス

あまりの用意の良さに感心するやら呆れるやら微妙な気持ちになる  
中を見回すと

奥には更に鍵の付いた扉が……

どうやらこの中に魔王が居るらしい

「中が見えないです」

隙間から中を覗こうと思ったが扉に隙間が見当たらない  
再び鍵を開こうとするも、ここだけは嚴重に閉錠の呪文か何かの魔  
術がかけられて、びくともしない

「仕方がないからこの部屋を漁ってましょか」

ラプラススの提案によりせつせと部屋を荒らしていく三人  
その姿は、もはや完全にただの泥棒集団と化していた。

部屋から出てくるのは、料理のレシピやら裁縫の道具やらぬいぐる  
みやら望遠鏡やら何かよく判らない模型やら

およそ魔王が持つべき物とは思えないような物ばかり

魔王が意外に多趣味である事が判明した

あらかた部屋を荒らし終えた頃

勇者は棚の一番上の引きだしの奥の隅っこに黒い物体を発見

引っ張ってみれば、紐でしっかりと巻かれた古いアルバムのような  
物が出てきた

無言でそれを上に掲げる勇者

心なしか勇者の顔が興奮しているように見える

「「よくやった!」」



と、ラプラスとファフニールの二人が叫ぶと同時に積み上げた山が崩れ落ちてラプラスの行く手を阻んだ

「ああ……ちょっと、整理するから先に見てて」

そう言って山に身を埋める

ラプラスの言葉に甘えてファフニールと勇者は急いで机に座る。

「ふふふ、それじゃあ開きますよ」

ドキドキ、ワクワクが最高に高まり机に向かってそのアルバムを開こうとしたその時、勇者とファフニールの頭をむんずと掴む大きな手があった

「…………お前ら……………そこで何やってる？」

ドスの利いた声を放ち額に何本も青筋を浮かべた魔王が万力のよう  
にぎちぎちと頭部を締め上げる。

「え…………え〜と…………」

「…………あ…………」

流石の勇者もここまでしっかりと身動きを封じられてしまったら成す術が無い

まだ気づかれていないラプラスに助けを求めたが……  
助けを求められた当の本人はゴメンとジェスチャーし身を翻して風のように部屋を去っていった

( (に……逃げた!!) )

「釈明は無いようだな………なら」

バゴン

と回避する事も出来ず抵抗する隙も与えられず、爆音と共に二人の顔が机に減り込んだ

沈黙する二つの影

普通の人間が受けたら確実に死亡するような音がしたが、二人とも普通じゃないので恐らく大丈夫だろう

「暫くそこで反省してる」

頭から煙を立てて気絶する二人を部屋から引きずり出して、部屋に

しっかり鍵をかけたのを確認した魔王はそう言ってその場を後にした。

---

「あれ？他の二人は？」

「多分今頃魔王様のお仕置きを受けてるんじゃないかしら？」

「……………置いて来たんですか……………非道」

「何より我が身が可愛いってね」

額を真つ赤にして帰ってきた二人はその日ラプラスとは一切口を利かなかった。

その後、部屋を逃げたラプラスと何故か何も関係の無いハズのマインテイクも

どうせお前らが唆したんだろうと

結局、魔王の鉄槌を受ける事になるのだが。

実際に行動した他の三人はともかく……………

「何で俺まで……」

何もして無いのに……と歎き哀しむ魔族の青年が一人夕陽に黄昏れ  
ていた。

13、魔王様は勇者が大っ嫌いだそうです（前書き）

少しシリアスなパート。

### 13、魔王様は勇者が大っ嫌いだそうです

「……………は……………」

魔王は調理室で料理をしながら一人ため息をついた。

勇者がこの城に来てからというもの  
確実に調子がおかしくなっている……  
魔王はそう感じていた

昨日のあの時、自らにかけていた術の力が弱まり、その影響が身体  
に現れていた。

これまでそんな事は一度も無かったにも関わらず……………だ。

今の自分は明らかに普通じゃない

試しに指で火を燈す

指の上で大きく揺らめき伸び縮みする炎

魔術で行使される火は術者の内包する魔力の状態に大きく影響する  
火が揺れが大きくなるほど、魔力は不安定であり術の行使が難しく  
なる

……………魔力が安定しない

勇者が来る前は強風の中でも揺れ一つ無い安定した火を燈す事が出来たのに……………今は見えない風が吹き付けて消え去る直前の蝋燭の火のようにゆらゆらと揺れてしまう

何が原因であるか詳しい事は判らないが  
その一因が勇者であることは間違いない

そもそも勇者と魔王が仲良くしている事自体おかしい

このままでは  
自分が今まで魔王として積み上げてきたものが完全に崩れ去ってしま  
う気がした

(もう既にだいたい崩れているが)

何とかしなければ…………

一刻も早くこの城から勇者を叩き出す  
魔王はそう決心した。

「……………あ……………」

ヤバ、焼きすぎた。

フライパンの上のベーコンが焦げて煙を上げていた。  
別に食べられない事はないがこんな物を人に出すのはプライドが許  
さない、そのベーコンを自分用にし、新たにちょうど良い焼き加減  
のベーコンを作りはじめた。

「……………?」

今日の昼飯、ベーコンのサンドイッチを頬張りながら魔王の顔を見つめて。

「……………魔王、どうかしたか?」

勇者がそんな事を呟いた。

「……………いや、どうもしないが」

内心ドキリとしながらもなるべく落ち着いて答えた。

「魔王様がどうかしたの?」

「……………眉間のシワが深い」

「?そうすか?」

言われてラプラスがじっと見るも全然判らないと首を振る



「俺にも判らないッスね」

「気のせいだ」

そう切り捨てて、魔王は失敗して焦げ臭いベーコンのサンドイッチの最後の一欠けらを口に投げ込んだ。

---

魔王は必死に考えた  
勇者を追い出す方法を

勇者をこの城から叩き出すのは容易な事ではない

ただ、城の外に物理的に放り出しても次の瞬間には城の中に戻っているだろう。

転送術を使って未開の地に送り出しても、術の痕跡を頼りに座標を遡る可能性だってある。

異次元空間を作り出して閉じ込めたとしてもあの圧倒的魔力で涼しい顔して出てくるに違いない。

それに、部下の妨害だって考えられる。

あの勇者と親睦を深め過ぎのあの三人の部下が自分の行動を黙って見ている訳ない。

あの三人が見ていない間にこっそりとやる必要がある

………それらの事を考えて魔王は慎重に術を組み立ていった。

そして、術式が完成した。

転移術と認識操作、その他諸々を組み合わせた複合魔術、相手を見知らぬ土地に放り出した上で自信の位置とこちらの位置を認識出来なくさせる事が出来るといふものである、かなり強力な術で幾ら勇者でも之をまともに受けたらちよつとやそつとの事では此処に戻って来る事は絶対に出来ない  
上手くいけば永遠におさらば出来る

しかし、術を大掛かりにし過ぎたせいで使える条件が思った以上に限られてしまった。

満月の夜である事

対象が満月を見上げている事

術の基点となる魔法陣の上に対象が乗って満月を見たまま10分以上一歩も動かない事

対象の半径25メートル範囲内に行使者以外の人物が居ない事

対象の意識が行使者を認識していない事

魔法陣は隠蔽で隠せるにしても

どうやって、その上で満月を見させ続ければ良いのだろうか

しかも、こちらの事を全く認識させずに

魔王は出来る訳無いなど自嘲しながら

一応設置するだけ設置するかと魔法陣を描きその上に隠蔽をかけて

見えなくした。  
使う機会は無いだろーと思いつながら。

……だが使う機会は思った以上に早くやって来た。

勇者が来て直ぐに、  
寝る場所を取られてはたまらんと魔王が勇者に宛がった部屋がある、  
その部屋の前の窓の下、そこに魔王は魔法陣を設置していた。  
そして、勇者は……まさにその真上に立ち、満月をじっと見つめ続  
けていた。

勿論周りに人は居ないし、勇者は魔王の存在に気づいていない。  
作った術を使うのにこの上無いほどの好条件  
寧ろこの日この時の為だけに術が作られたかのようにだ

もう、あとは起動するだけ……

望んでいた機会がまさに今、やって来たのだが……  
魔王はその段階になって急に躊躇する

……理由は判らない……

……けど、満月を見上げる勇者の無表情のその顔が……

…何故か悲しそうに見えたのだ。

そんなことはない、と首を振り  
起動しようとするも身体が動かない

そんな事してはいけないと……頭が警告していた。

30分に及ぶ葛藤の後、

結局、魔王は何もせずとその場を去った。

何も、今やらなくてもきつと次がある  
だから……今日だけは勘弁してやる

---

次の日

「……………ん」

いつも通りに食欲旺盛な勇者  
昨日感じた悲しげな雰囲気は全く無い

「……………魔王、おかわり！」

いつものようにおかわりを要求し、部下達と他愛の無い話をしているあの葛藤は何だったんだと自分が阿保らしく見える

やっぱりあの時使っていれば良かった……………

相変わらず無表情の……………しかし、どこか楽しそうな勇者を見て

今度こそは城から追い出してやるよ……………覚悟しておけ

再び決心を固めて

……………自分が今、小さく笑ったことにも気づかずに

自らも食事を進めた。

14、ヒロインが正体を現し……ええええ！！？！？（前書き）

まさかの急展開、

14、ヒロインが正体を現し……………ええええ！！؟؟？

風呂、それは癒しの空間

「ふは〜」

この時間だけは人目を気にせずに生まれたままの姿を曝す事が出来る

この身にかけて身体に負担が掛かり疲れで肩が力チコチに凝る術を  
解き、

至福の顔で浴槽の中で伸びをする

78

本当は、毎日のように入っても良いぐらいだが  
魔王の身体はフケや垢で汚れる事は無く、必然的に風呂に入る必要  
がほとんど無いし

そもそも、魔王である自分がそんな女々しい事をしていたら周りに  
示しが見つからない

「……………まあ、今更な感じはするがな」

勇者に負けて、いいように使われる毎日に魔王の威厳なんてものは、  
とうの昔に風化して意味の無いものになっている

ホントに全くと言って良いほど

何だか考えててイライラしてきた

「こん畜生!!」

怨恨の掛け声と共に

八つ当たり近くに近くにあった桶を握り全力で放り投げつけると、一直線に闇を突き進んだ桶はカコーンと間の抜けた音を立てて壁を跳ね返り放物線を描いて何処へとも無く消えていった

「けっ」

浴槽に沈みその長い髪を弄り遊ぶ

片手間に

天まで届く氷の柱

指の上に小太陽やブラックホール

闇で出来た彫刻

そんな物を作りながら

本当は俺だって強いんだぞー！ー！ー！ー！

と一人いじける魔王



制限無しならどんな神にだって負ける気がしない魔王だが、実際にはそういう訳にも行かない

深く、一つ溜息をついて

そろそろ出るか……………

水を滴らせながら浴槽を立った

---

「……………痛」

額にコブを作り、日が昇る前の真っ暗な廊下を勇者は桶を片手に歩いていた。

寝ている最中に何処からとも無く飛来してきたそれ、

どうして自分の所に飛来してきたのか判らないが、どこからどう見ても風呂で使う桶にしか見えないそれ

魔王に之を何処に返せば良いのか聞こうとしたが、何故か魔王は部屋に居なかつたため、勇者は仕方が無くうる覚えの記憶を頼りに風呂場に桶を返しに来ていたのだ

「……………ここか…？」

解りやすく大きく温泉マークの付いた扉の前で立ち止まる  
誰か……魔王が、中に居るのを感じた……まあ、魔王なら入っても  
気にしないかと扉に手をかけようとするが……

ガチャ

扉を開くハズだった勇者の右手は

「……………ん?…」

何故か触り心地の良い小ぶりのマシユマロを掴んでいた。  
そして、目の前には半裸の黒長髪の美女が……………目を見開いてこち  
らを見下ろしている……………

「な……………んなん」

「……………へ……………あ?」

状態を把握しきれない双方は共に驚愕の表情をあらわにしながら完  
熟したトマトのように顔を真っ赤にし、訳の判らない意味不明な言  
葉を発しながら動く事も出来ずにいた  
そして、二十秒後美女が沸騰したヤカンのように顔全体から煙を吹  
き出しながら



何が起こったのか  
判らない部下達はただただ互いに顔を見合わせるのであった。

14、ヒロインが正体を現し……ええええ！！？！？（後書き）

やっちまった感があるなあ……

けど後悔はしてない

15、魔王様は引き込もったようです(前書き)

15、魔王様は引き込もったようです

魔王の作り出した暗くて深い異次元空間

その深い空間の奥底でぼつりと佇む黒い物体が存在した。

それは死体のような色と形をした

死体のような肢体であり

姿態であった。

……つまりは

魔王が一人死んでいた

……主に精神的に

ボロ布を被り

滑らかな、長い髪はくすみ、汚れ、縮れ  
肌はガサガザ  
目も澱んで焦点が定まらず  
まるで腐った魚の目玉のようだ

「あー」

とんだ災難であった  
風呂から出て、廊下にかすかに何かの気配を感じて迂闊に扉を開いたのが運の尽き  
勇者にあらぬ所を触られた上に暴走して半裸状態で走っている所を部下達に見られてしまい

あの出来事で今まで250年間隠し続けていた秘密が恐らく完全にばれてしまった。

……自分が見た目貧弱な女である事を

変にプライドの高い魔王は秘密がばれて、あまりのショックに

……もう二度とあの城には帰れない

……魔王なんて名乗れない

……死にたい……気分

そんな事を思い、飲まず食わずでこの異空間に引きこもり続けて、



もうこの時点で二日が経過していた（魔物は食事をしなくても魔力だけで一ヶ月ぐらいは堪えられる）。

……そういえば今頃、あいつらはどうしているのだろうか。

流石にある程度の落ち着きを取り戻し、そろそろ城の様子が気になり始めていた

しかし、まさか今更戻る訳にもいかず魔王はさんざん悩んだあげくコッソリと城の中の様子を覗く事にした。

引きこもりがテレビを見るように

ボロ布を頭から被りながら

空間に映像を投影し、様子を窺う

そして送られて来る映像

この時の魔王は知るよしもない………  
魔王の居ない間に城の中はかなりカオスな状態に変貌を遂げていた  
事に

まず、まず最初に映ったのは勇者の部屋

「……………めしい……………」

涙を流しながらベッドの上に横たわり、ぐったりとする人影

く……………と

お腹が小動物のように鳴き声を上げている

この中で唯一の人間である勇者はどうやらこの二日マトモな食事が出来なかつたらしく、腹を空かせて今にも死にそうだ

「……………調理室に食材はあるだろ……………」

自分の食事ぐらい自分で作れと呆れながら視点を变えて  
固まる

「キャハ！！みなさんホントにだらしがないですねえ！！私はこんなに元気なのにい！！！！」

何故かめちゃくちゃハイテンションで何かヤバイ雰囲気纏ったフ  
アフニールが

誰も居ない廊下で一人叫んでいた

周りは散らかり放題

しかも、異常な量のワームが辺り一面をはいずり回り  
床も壁もベタベタ

まさか……………

調理室に視線を移すと

口に謎の物体を突っ込まれたまま

真っ白な顔に白目を剥いて仰向けに倒れるマンティーク

机には元々食材だった物質が生物兵器と成り果ててズラリと並んでいた

辺りにはワームが飛び散ったそれらを喰らい増殖し続けている

「……………」

啞然としながら更に視点を移す

すると、ラプラススが自室が映った

「……………」

元々ラプラススの一族は清流の流れる綺麗な水の中に住む魔物であるため汚れや澱みに特に敏感である

なのにファフニールの大量増殖したワームの体液で辺りはドロドロと悪臭が漂い、空気は澱んで雑菌が繁殖してとんでもない事になっている

不潔な事、極まりないこの城はラプラススにとってもう地獄だ

真っ青な顔をしながら頭を抑えてソファーに横たわっている

「……あ……頭が……」

少しでも部屋への汚染を防ぐために

堅く閉ざされて隙間を布で塞いだ扉からも廊下の変な液体が漏れだして今もなお、少しづつ部屋を汚染している

イロイロとかなり、非常に危険な状態だ

試しに城の他の部屋も覗いてみたが何処もかしこも荒れ放題

「私の時代が到来いい!!!あはははは!!!」

目つきがヤバイファブニールがついに高笑いを始めた

それはもう

愉快そうに

高らかに

目だけ笑わずに

笑い声だけが、ただひたすら城の中に響き渡っていた。

「……………」

魔王はそっと画面を消した……  
そして……………」

「なにやっとなんじゃあの馬鹿共はあ……!!……!!」

思いつ切り叫び声を上げた

自分が居ないと何も出来ないとは……………」  
つてか、どうやったらたった二日であそこまで城をめちゃくちやに  
出来るんだ??  
なんだ?あいつらはガキか何かか??!!

………もはや、こんな所でいじけている場合ではない、事は一刻を争う

魔王は異空間を抜け出すと急いで身嗜みを整えて部屋を出た。

「あははははは！……！！！」

「五月蠅い！！いつまで笑ってる！！！」

バゴンと

魔王の拳がファフニールの頭に振り落とされた。

ピタリと笑い声を止めゆっくりと振り返るファフニール

「魔王………様？」

自分を赤い目で見下ろす黒髪の青年風の姿の魔王を確認し、

「魔王さまあああ……！！！」

ファフニールは泣いて顔をぐじゃぐじゃにしながら魔王に抱き着いた

「えぐっ………もう………二度と戻って来ないかと思いました………」

何も泣く事は無いだろうと嬉しいような恥ずかしいような魔王  
どうにか正気に戻ったようで、なによりだ

「……………それよりも、この状況をどうにかするぞ……………」

魔王が手を掲げると、それを合図に廊下を埋め尽くしていたワーム  
が次々と破裂し、消え去っていく

「にゃ！？私のワームが！……………酷い！」

ファフニールは、自分の使い魔（？）が大量殺戮された事を抗議す  
るが

「……………全部消してやるのか？」

額に大量の青筋を浮かべ笑顔でそう言った。言葉の裏には『誰のせ  
いでこんな事になっていると思っっているんだ、ぐたぐた言っている  
とお前ごと消すぞ』という意味も含んでいる

「っ……………しめんなさい……………」

次に手を横に払つと水と風が廊下を吹き荒れ、ワームの残骸（まだ生きている物も含む）と澱み切つた空気を押し流し去つた。

間を開けず手近の扉を開き有無を言わさず水をぶち込む

「ぶつ！！？」

水に流され床に転がるラプラス

「何す……！……あら……魔王様」

「調子が良くなつたら片付けを手伝え」

綺麗な水を浴びて見た目元気になつたラプラスにそれだけを伝えると

足早にその場を去り次の目的地に向かつた。

そして調理室……

「……………」

部屋の真ん中に陣取る口に異形の物を突っ込まれた真つ白い奇妙なオブジェ



「……………これは……………生きてるのか？」

「……………多分……………辛うじて」

「……………まあ、放っておいても大丈夫か」

「ですね」

端に退かして放置する事が決定した。

廊下同様に部屋のワームと生物兵器を一掃し調理室の食材を確認する

「あー、殆ど録な食材が残ってないじゃないか」

ぶつくさ文句を言いながらも魔王は  
どうにか無事だった野菜と肉と卵と小麦粉を混ぜて焼き、お好み焼  
きのような簡単な料理を作った。

一先ず三人で先に食事を終えて、

料理を載せた皿を片手に

魔王は片付けをファブニールとラプラスに任せると腹を空かせているであろう勇者の部屋に訪れた。

『入るぞ』と声をかけて、部屋に入ると何故かこちらを見てビクリと身体を震わせる勇者。

「ほれ」

魔王は取り敢えず部屋の机に持ってきた料理を置いた  
しかし、勇者は料理に全く手をつけようとしない

「?.....どうした?」

魔王はそうとう腹減っているから  
直ぐにがつつくと思っていたのだが.....

すると

「.....魔王.....すまん」

結構、深刻そうな顔で謝ってくる勇者

「……………」

魔王は無言で考えた後、勇者の頭を皿でひっぱたいた。

「……………痛」

「んな事どうでも良いから食べ」

そう言ってフォークでお好み焼きを目の前に突き出す。

少し躊躇して、……………一口

モグモグと口を動かして、飲み込み

「……………んまい」

勇者は満面の笑顔を浮かべた。

## 16、レッツお風呂(前書き)

女と判明してから魔王が若干お色気要員になってるような気が……

……

……まあ、いつか(思考放棄)

## 16、レッツお風呂

城の中の片付けが大方終わった頃

一息ついて、お茶の時間にする事にした

幸運にも残った茶菓子をだし

お茶を炒れる

優雅な時間が流れる

しかし

「…………臭い」

その場に似つかわしくない臭り（かおり）……………

どこからともなく漂って来る異臭

臭いの原因を探ってみると……………

発生源はファフニールだった。

恐らく先の暴走でワームを大量発生させたり…あのゲテモノと呼ぶのもおこがましい生物兵器を作っていたのが原因だろう  
服の所々に緑やオレンジ色の物が付着し見た目にも汚い

「…………風呂行きだな」

ギロリとファフニールを睨む

「いつ嫌です!!!!」

即座に魔王の言葉に猛反発する

……ファフニールは昔から身体を洗われる事を極度に嫌っている（清潔を好まないのはファフニールの一族の性質だがファフニールは輪をかけて酷い）

本人曰く『身体の汚れは私のアイデンティティ』だそうで汚れを好む、きつちやない彼女にとって風呂なんて以つての外なのだ

「私、そんなに汚くありません!!!!」

「全身から異臭漂わせてる奴が何を言う」

「わ、私は女の人以外にハダカを見せられません!!!!」

「俺も一応女だが？」

ばれてしまったこの際だから完全にぶっちゃけた。

「見た目が男の人じゃないですか!?!」

なにげに酷い発言をするファフニール  
次から次へと言葉が紡がれて

まあ……………盗つ人猛々しいとはこのことを言うのだろう（違うか？）

「どうしても、と言うのなら魔王様が女の人になって一緒に入って  
くれるなら考えても良いですよ」

そんな事まで言い出した、

魔王は女の姿を嫌っているみたいだから絶対にそんな事はしないだ  
ろう……………というある種の確信を以って言ったのだが

「ふむ……………」

パチ

指を鳴らすと同時に縮む身体に丸くなる体型

「へ？」

魔王はアツサリと女としての正体を現してしまった。

「これで満足か？今更隠した所でどうしようもないからな」

「ああ！！ずるい！！ならあたしも」

ラプラスが自分も混ぜてとせがむが…

「部外者は引っ込んでろ」

冷たく突き放された。

軽くいじけているラプラスを無視して

ワシリ、と魔王がファフニールの頭をいつかのようにしっかりと掴む  
なおも嫌だあ！！と叫ぶファフニールを『往生際が悪い』とズルズ  
ル引きずりながら魔王は入浴所に向かった。

「うあ……………」

必死の抵抗虚しく、鼻の穴から指の先まで隅から隅まで体中を徹底的に洗浄されたファフニールは精根尽き果てたように浴槽に横たわった……卵のようにツルツとした餅肌が眩しい…。

「うっ……………体がスースーして気持ち悪いです……………」



「なら、次からは調子に乗るな」

魔王にバシツと言われた。

ファフニールが暴れまくったせいで、身体中ビショビショになり、ついでにだからと湯舟に浸かったそんな魔王を横目に見て。

「……………魔王様って美人ですよね……………」

ぽつりとファフニールが呟いた

「……………そうなのか？」

一瞬静止して

結構真顔で魔王は聞き返した

「え、と十人居たら十人振り返る程度には……………」

「ふーん」

自分から質問した癖にさして興味も無さそうに流してしう魔王。

「あー何か思う所とか無いんですか？」

あまりに素っ気ない反応に思わず聞いてしまった。

「んあ？別に……………なんでだ？」

「いや……………魔王様……………自分が女だって知られるの嫌がってましたから……………」

バツが悪そうに頭を少し掻いて

『あー、その事か』と

少し悩んだ後、言葉を紡いだ。

「……………女だ、なんて言ったら敵味方関係無しに嘗められるだろうが、……………魔王なんて人から認められなければただの飾り、そうなれば俺が居る意味なんて無くなるからな」

魔王とは、ある種の象徴でもある。

その象徴として絶対的に必要な物が強さであり

弱き象徴では誰ひとりとしてついては行かないだろう

女である事が弱さの証明であるとは限らない、むしろ全くの偏見であるが人々(?)はそうは思わないだろう、『女の癖に』『コイツで大丈夫か?』と口々に言うに違いない……………

……………そういう不信があつては国は纏まらないのだ

「……………そんなもん、なんですかね」

「……………そんなもん……だ」

少しの沈黙の後

「……………そんなこと無いと思います……………少なくとも私は……………」

そんなファフニールに

魔王はふ、と笑いかけ頭をそつと撫でた。

「魔王様……！！！！背中流しましょうかぁ……！！！！」

「ぶっ」

しんみりとした雰囲気をぶち壊すように、突然扉が開きラプラサスが突入してきた、思わず魔王が吹き出す。

「な、何を……………」

するつもりだと言葉を続けようとするが

その前にラプラスは言葉を待たずに素早く魔王の背後に廻る

「さささ、遠慮無く」

背中流すんじゃないの？

と疑問に思うファフニールをよそに

湯舟の中で何を流すのかとかそういうのは関係無く  
魔王の意向を完全に無視してあらぬ所に手を伸ばす。

「ひゃ、お前、何処触って……」

「ふふ……何処でしょうねー」

「な、うあにゃああー！……！……！」

---

陽気の中で一人茶を飲む勇者……

「………姦しいのな」

風呂場から聞こえる悲鳴を聞きながら勇者はそんな事を呟いた。

17、女は怖い…だそうです(前書き)

回数を重ねるごとに更新が遅くなっているぜ……………OTZ

17、女は怖い…だそうです

暫くして……

「……………」

調理室で放置されていたマンテイクは  
真っ青な顔してテラスにやって来た。

「……………」起きた？」

勇者はマンテイクの分の紅茶を煎れるとカップを渡した。  
ありがとう、と受け取り向かいの席に座る。

「うーん……………」なんだか気絶する前の記憶が無いんだけど……………」

ついでにお腹が物凄く痛い、

何か思い出しそうだが、思い出す直前になると何故か急に拒絶する  
ように記憶が離れて思い出せない

そのため何が起こったのか勇者に聞こうと思っていたのだが

「……………」思い出さない方がいい」

そんなマンティークの疑問を見越してか勇者が憐れむような顔を  
して影のある声でそう言った。

「……………」

少々納得がいかないもののそのうち思い出すかと紅茶を口に含んだ。

---

勇者とマンティークがお茶を終えた頃

ちょうど

風呂から上がった魔王達が帰ってきた。

風呂上がりでまだ湯気を立ち上らせながら、いつもの姿に戻った魔  
王は……………怒りやら恥ずかしさやらで少し頬を紅潮させ立っている。

「……………魔王……………どうした？」

「……………もう二度とコイツらとは風呂に入らん！！！」

「……………はあ」



何だか魔王に宣言された。いったい、風呂場で何をされたのやら……のぼせてしまったのか真つ赤な顔してポケーっと突っ立ってるファニールの隣で  
ラプラスが悪戯そうに微笑んでいる

「あー……………魔王様……………帰ってきてらしたんですか……………」

魔王を見た、マンティークは複雑な顔をして何か言いづらそうに口を吃らせる、どこか他人行儀だ

別に良いのだが……………なんか、モヤモヤしたものが胸につつかえてくる

言いようの無い不快感

……………そんなものを感じた時

突如、ラプラスが邪悪なオーラを漂わせてマンティークの肩を掴んだ

「どついつつもりなのかしら……………ねえ」  
素敵な笑顔を浮かべてそう呟いた。

……………怒ってる？

何がラプラスの気に触れたのか全く解らないマンティークは頭の中に疑問符を大量に浮かべる

「ちょっと……こっちに来なさい」

四の五も言わせず相手を逆らわせない口調のラプラスに

「……………はい（汗）」

恐怖のあまり声を裏返ししながら返事をする……………こうなっては従うしか道はない

廊下を出て、ラプラスに何処かの部屋に連れていかれるマンティーク……………

その様子を見守る三人、数分間の沈黙が流れる

「……………マンティさん、何されるんでしょうか？」

「……………さあな……………」

魔王はファフニールの疑問に自分も解らないと返す。そもそも何でいきなりラプラスが怒っているのかすら……………  
魔王とファフニールはうーんと頭を悩ませる……………

……………実はラプラスの怒っている理由に何となく察しがついてい

る勇者は魔王達に教える事もなく陽気の中で横になり  
……十秒で寝てしまった

「うぎゃあああ！……！！……！！……！！……！！」

城中に響き渡る大きな悲鳴

「……………」

いったい何をされてるんだろう……

再び部屋に沈黙が流れる

(勇者は悲鳴を聞いても全く起きる気配が無い)

……と駆け足が廊下に響いたかと思うと

マンティーク扉を押し開いて

魔王の目の前にやって来た。

つてか………なんか土下座してきた。

「魔王様！！………な……なんか、よく解らないけど、すみませんッス  
！……？」

なんか、よく解らないのに謝られても困るんですが………

と、どっどっ反応すれば良いのかと考えあぐねていると………

「ほら、まだ魔王様はお怒りよ？」

「ひ……………」

後から来たラプラスがそんな事を言う、どうやら自分が怒っている事になっているらしい

別に俺は何も怒って無いんだが……

しかし、胸のつつかえが抜けない魔王は

「その通りだ、もっときちんと謝れ」

ウサ晴らしにラプラスの余興に付き合う事にした。

数十回にも及ぶ土下座のやり直し

最後の方にはもうヒーヒー泣いて

ファフニールも同情を禁じ得なかったそうなの

少しやり過ぎたかな…と

しかし、なんだかよく解らないが心は晴れた魔王であった。



## 18、魔王様のコレクション

あれから三日

城の片付けは未だ終わっていないかった。

散らかすのは簡単なれど片付けるのにはその倍以上かかる

引きこもったその日に、手分けして魔王を探した時に開け放った物置やタンスの扉、その時たまたま見つけて遊んで遊びっぱなしのゲーム盤等の多量の遊具の収納

ファフニールが暴走した際に破壊されたランプや装飾品の修理、未だ城全体に散らばるワームの駆除& a m p ; 汚染の浄化

なにせ、やる事が多過ぎる

未だ魔王城の掃除は7割しか終わっていない

……いや、寧ろよくこの人数この時間内にここまで進められたと言  
うべきか……

「勇者たち寝てないで」

掃除など全くやる気の無く端の方でグースカ寝ていた勇者を起こす。

「……………」

寝起きで頭の働かない勇者は部屋の中をあっちへフラフラこっちに  
フラフラ

寝ていて貰った方が掃除がはかどったかもしれない

「にしても何なのかしらこの部屋」

「なんか変なものばかり置いてありますよね」

廊下の突き当たり位置するこの部屋はイロイロ物が敷き詰まった。  
物置のような部屋なのだが  
置いてあるものは

謎の四角い箱（方式のビデオデッキ）やら紙の巻いてある杖（和  
式傘）やら先端に半円球の付いたクネクネしたもの（電気スタンド）  
数字の書かれた板（電卓）等  
ファンタジーの世界ではまず見かけ無いような物ばかりだ。

勇者は何となく床に落ちていた、あるものを拾った。  
上の出っ張りに丸、四角、三角、二本線の描いてある奇妙な楕円の  
形の箱

試しに上の出っ張りを押し込んでみる……

すると……………

チャチャン、チャン

突然箱から音が鳴り出した。

ビクッ

と手を離して床に落とす

相変わらず音が鳴りつづけるそれを四人は揃って凝視する

“さあ！ニヤンニヤン体操の時間だよお〜〜！！良い子のみんな！  
！お姉さんと一緒に元気に踊ろ〜！！”

若い女性の掛け声と共にニヤンニヤンと軽快な音楽

“手を頭に載せてニヤ〜オ……………右手を前に出してえ〜猫パンチ！！”

「おいお前ら、勝手に休んで何やって……………」

井戸から水を汲み取って戻ってきた魔王が

サボっている四人を怒鳴りかけて固まる

部屋の真ん中で四人の注目を集めている物体……………

それは最近の魔王がマイブームで、風呂上がりに毎週欠かさずやっている“よいこのニヤンニヤン体操”のテープがセットされたカセットテープ

何故それが！？



「魔王様……この鉄の箱は何なんですか？」

テープの内容について聞かれたらどうしようかとドキドキしたが  
ファフニールが目の前の今まで見たことも無い物体について不安そ  
うに聞くのを見て

ダイジョウブ、マダバレテマセン、ウン

ホッと息をつく

「ああ、それは異世界から取り寄せた音を記録して再生する道具だ  
……たしかテープレコーダ、とか言ったな……害は無いから安心し  
る」

「……………異世界って……………」

魔王の発言に驚きをあらわにする

この世界ではお伽話等で異世界から召喚された人間や魔物の武勇伝  
はよく聞くが

実際に召喚される様子を見た者は誰も居ない

異世界なんて、物語の中にしか出て来ない迷信の類だと思っていた  
のだ。

今まで異世界と交流があつたなんてそんな事聞いた事も無いし、嘘  
である可能性もあつたが、部下達は魔王がそんな下らない嘘をつか  
ない事をよく知っていた。

「確かに魔王様、異次元空間を作るのが得意だって言ってましたけど……そんな事も出来るんスか？」

「いや……俺の作った空間に不法侵入した“自称”通りすがりの旅人と取引してな……」

作った、というのは恐らく異次元空間の事だろう  
マンテークが顔をしかめる。

「……つかぬ事をお聞きしますが異次元空間って外部から侵入なんて出来るんですか？」

「出来る訳ないだろ」

あっさりとそう言いかけた

異次元空間とは他からの干渉を一切排除した空間である、全ての出入りは制作者の意思によってのみ行われ  
外部から侵入する事は絶対に有り得ない

「……まあ、あの化け物は頭上半分を吹っ飛ばしても涼しい顔してたからな……それぐらいはするだろうよ……」

思い出すのもウンザリだという顔で呟いた。

今の発言はこの世界の根底を覆すような物だったが  
それ以上にそんな化け物と取引する魔王にある種の尊敬の念を禁じ  
得ない

「これも、そいつから手に入れた物のうちの一つだ」

「そうなんですか……………」

ファフニールが納得したように呟いた

「……………ニヤンニヤンやってるのか？」

グはっ

勇者の突然の不意打ちに打ちひしがれる魔王、

「そそそそんな訳あるかあ！！！！」

そんな訳あります。

「……………そなのか」

ラプラススが“ぷ”と吹き出す

「あはは！さすがの魔王様でもこんな子供の踊りをする訳無いじゃない！」

ラプラススの珍しく魔王をフォローする言葉がビシバシと魔王の心を痛め付ける。

まおうはせいしんに100のためーじをつけた

「他にもイロイロありますけど、これ全部異世界の道具なんですか？」

「……………！…あ、ああ一応この部屋のは全部そうだ……………」

「へえ〜凄いい！！使い方解るんですか？」

「いや……………使い方は別料金だとかほざいてどっかに行っちゃまいやがったよ……………あのクソ野郎……………まあそれでもイロイロ研究して多少

なら解るようになったが……」

「じゃあ！私達にもイロイロ教えて下さい！！」

欲しい玩具をせびる子供のような瞳を輝かせ魔王を見つめるファフニール

「あ……ああ……」

「やった！！じゃあさっそく！！、これは何ですか？」

「私もこれが気になるんだけど……」

「これ教えて下さいっ！！」

「……………ん」

ファフニールに返事を返すと四人は方々に次々と部屋の物を押し付けてくる

「……………」

言ってしまった手前今更NOと言えない魔王は次々に沸いて来る四人の疑問に受け答えしていく……

それから半日の間、部屋では異世界の道具についての研究会が行われる事となり。

魔王が解放されたのはもう深夜

やっとの事で部屋にたどり着き、疲れた足どりでベッドに見を投げ出し枕に顔を埋める。

疲れた……………ん？

何か忘れているようなと頭を悩ませ……………  
考えを放棄しようとした所で気づく

あれ……………掃除は？

気づいたものの、もはや疲れきった魔王は何もする気も起きず……………

もういい……………や

闇に意識を沈めた。

## 19、大富豪で勝負だそうです

五日間の日をかけてようやくと城内の掃除（& a m p・ついでに修繕）が終わって数日後

「わあ、すごい……」

真っ赤に燃え盛る火の玉がファフニールの手の上を浮いた。

あれから日々の勇者の指導によりファフニールの魔術の腕は大分上達していた。

特に種族柄なのか火の属性の魔術は上達が早く

最初のうちはマッチの大きさの火を出すことも難しかったが

今では、水晶玉大のファイヤーボールも簡単に作れるようになっていた。

勇者も満足そうに頷く

「ふふん もう魔王様にも負ける気がしません」

調子に乗ってそんな事まで言い出した。

「ほづ……なら試してみるか？」



どこから現れたのか魔王が半径一メートルはあるつかというファイヤーボールを頭上に出現させてファフニールを見下ろす。恐怖に怯えるファフニール

パコ

「いつ!？」

聞き慣れた音と共に魔王の頭に突き抜ける激痛、床を転げ痛みに悶える魔王

「……………弱いものイジメはダメな」

「そそそ、そつですよ、魔王様」

その言葉を聞いて勇者は多少キツイ目で睨み

「……………ファー、調子に乗りすぎ」

「……………じょう、じゅめんなさい」

調子に乗りすぎた事を素直に謝った。

魔王が回復してきた頃

悪戯な笑みを浮かべたラプラススがやって来た。

「ヤッホー」

ラプラススの手元にはトランプと“よいこのニャンニャ……………

バゴツ

思わず魔王は壁に頭を減り込ませた。ラプラススの右の手にあるのは先日異界の倉庫にあった“よいこのニャンニャン体操”のカセツトの入ったレコーダー……………

何故それを……………

「……………大丈夫……………か？」

魔王の奇行に

困惑げな顔をした勇者が声をかけた。

「い…いや、なんでもない」

「?、まあいいわ、みんなトランプやりましょう!」

それだけじゃ無いだろう、という魔王の右手に注がれる視線を受けてラプラスは更に続ける。

「負けたらこのニャンニャン体操をやって貰います! (勿論ネコミミをつけて!)」

どうやら、あのニャンニャン体操の音楽を聴いて気に入ってしまい、他の人に躍らせようと画策していたらしい案の定、そんな事だろうと思っていた魔王。

「俺は下りる」

賭けの内容を聞いて魔王はゲームを即座に辞退した。

「えー!? 何でえ!」

何が『えー? 何で?』だ!?!?!?

最終的に勝とうが負けようが面白がって自分を躍らせようとするの

は目に見えている

何故自ら首を絞めるような真似を進んで出来ようか、いや出来まい

(反語)

完全に口を閉じ、我関せずと

テコでも動かない決心をした魔王に

一言

「……はあ……幻滅しちゃうなあ」

ピクリと魔王の額が動いた

「どんな苦境にも堪えられる素晴らしい人だと思ったのに……敵前逃亡なんて……いや、やらないなら良いですよ」

ふん、と

嘘泣きで涙を流しながら

冷たく言い放ち部屋を出ようとするラプラサス

「良いんですか？ラーサ行っちゃいますよ？」

いつの間に(本当に)か魔王の隣にやって来たマンティークも外野から声をかける

「…や……」

魔王がボソツと呟いた

「？何ですか魔王様」

途端にドアに向かう足を止め、ニヤニヤとした顔をクルリと魔王に向けて顔を伺う

「やってやると言ってるんだ！その下らないゲームを！！」

そこまで言われたら、もうやるしか無いじゃないかと叫んだ  
してやったり、の顔をしたラプラスは直ぐに向き直り

「んでは、さっそく始めましょう！！」

さっそうとカードを配りはじめた

これから始めるのは、みんなのテーブルゲーム大富豪

机の真ん中に出されたカードより大きい数を出していき、出せなく

なった所でカードを切って再びカードを出していき最初に手札が無くなった人が勝ち（大富豪）最後まで手札が残った人が負け（大貧民）となる

最大の数はキング、エース（1）、2と地域によって変化するがここでは2が最大

8切り、11リバーズ、革命、反則上がりのペナルティありのルール手札を見てみると魔王の手札はそれ程、悪い物ではなかった

大きな数から小さい数まで、偏らずに万遍なくあるし……

……何よりも何にでも変化できる最強のカード、ジョーカーがあるこれなら、負ける事はまずないだろう……

まずはラプラスが最初にカードを出す。

次に魔王、マンテイク、勇者、ファフニールの順に回っていく

手札が良いとはいえ油断は出来ない

……この勝負、絶対に負けられない、魔王は心して勝負にかかった。

数分後……

勝負も中盤といった所だろうか、

勇者がジャックをクイーンのダイヤで縛り、誰も出さない事を確認して10を出す

「そろそろ上がれますかねえ」

手札を大分減らしたマンテイクがふふふと笑いながら10の上にエースを重ね呟いた。

「うーん…」

続けてファフニールが  
手札を出すかどうか迷った末  
2で切つて7を出す

ここまで、それぞれが順当に手札を減らしていく  
順当も順当、  
雑談を交えて  
やっている本人達はそれなりに楽しんでいるが

描写する身からすると  
変化がなさ過ぎて面白みに欠けるゲームだ…そんな思いが通じたの  
か……

ラプラスは8でカードを切り

「かつくめーい!」

順に並ぶ四枚のカードを出す  
全てのカードの順位を逆転させる革命を起こす

しかし、魔王も黙っていない  
絶好のチャンスと

キラーンと目を光らせ

ここで決着を着けようと勝負に出る

「革命返し!!」

ジョーカーを織り交ぜた4枚のカードで革命を返して通常状態に戻す。

ダイヤで縛っているし流石にこの人数で三回目の革命は出ないだろうと

これが流れれば最後のカスカードを出して上がりだ

よっしゃ、一先ず危機回避!!

と心の中で拳を握るが

「……………ん」

ここで魔王に死刑宣言…………



勇者が再び革命を返してしまったのだ。

手元に残っているのは3のカード一枚のみ……

現在革命中で最弱から最強のカードに変わった3のカードだが

大富豪には

その時に最大となるカード、特殊なカードは最後に出してはいけ  
ない、というルールがあり

もしも、そのカードを然るべき場面で出した場合ペナルティとして  
その人は強制的に敗者（大貧民）となる

因みに革命中の最大の数も3となる

「……………」

脂汗をタラリと垂らす魔王

ヤバイ……………このままでは……………

……………確実に負けてしまう

現状のままカードを出せば反則で強制的に敗者（大貧民）に

だが、流石に四度目の革命が起こる可能性は非常に低いし

例え、革命が起こったとしても今度は最弱のカードに成り下がった  
一枚ではよほど運が良くない限りどう考えても上がれる訳が無い

魔王は控え目に辺りを見回す

……… 幸いなことに今はファフニールの番で誰もこちらを見ていない。

今ならいける……

山札から適当なカードを抜き出して手札に加えようとコツソリと手を伸ばす。

が、素早くラプラスの背中から触手が伸びその魔王の手を押さえ付けた。

ラプラスのニンマリ顔が目に入った。

「ルール違反はイケマセンねえ魔王様」

何だ何だと周りもこちらに注目する中、  
淡々と告げてネコミミを手にとる

「はい………罰ゲーム………」

目をキラキラさせながらネコミミを構えながら迫って来るラプラス  
正直言っただけ怖い、めっちゃ怖い

顔を引き攣らせて震える魔王

……… あらぶしぎ、泣きたくなってきた。



## 19、大富豪で勝負だそうです（後書き）

いつも、面倒で書くのを省いてるor適当に変な事を書いてる後書きですが

たまにはマトモに書いてみます!!

さて、会話文でフルネームを使うのも違和感があったのでラプラサスとファフニールの略称、ラーサとファーというあだ名を使ってみました。

マンテイクにも、マーティという略称を考えてみましたがいきなり三人の略称が呼ばれ始めるのは変だし  
コイツだけ略称が微妙な感じがしたので取り敢えず保留

そのうち文章中の名前も略称に変わるかも（……いちいち打ち込むの面倒臭い）

……この後、魔王はニャンニャン体操を人前で踊るハメになる訳ですが

魔王様のなまめかしいニャンニャン体操を描写するべきか……

悩む所です……

（魔王の性格がマスマス変になりそう……）

何か注文がある方は感想板でどうぞ。

…ここまで駄文を読んでいたいた方々  
どうも有り難うございます、  
日に日に遅れる更新に  
何かと至らない文ですが  
これからも読んで頂ければ光栄です。

## 20、ニヤンニヤン体操

）

魔王城のテラスにて  
例の魔王の罰ゲームが行われていた。

「もつと脚上げてえ！！」

「嫌そうな顔しないでくださあい！！」

その中で顔を赤くしてテンションノリノリで  
声を上げるラプラスとファフニール

「く、……………」

魔王は屈辱的な顔

さつきから声を張り上げるこの二人は……  
踊る度に執拗にダメ出ししてくるのだ  
そして駄目な所を指摘してやり直しを命じてくる

しかも、ついさつき郵送屋のガーゴイルがラプラスの故郷からち  
ょうど酒が届けて、女達はそれを飲み明かしてダメ出しにさらに拍

車がかかっている

(マンテイクは甘い酒は苦手だと辞退、勇者も未成年であるため断った)

訳の解らない発言に異様なテンション

不快な笑い声、

ウザい、非常にウザい

二人もウザいが

哀れみの視線を送ってくるマンテイクも

我関せずな勇者もかなりウザい

……今でもう7回目のやり直しだ

そろそろ、魔王の堪忍袋の緒が限界だった。ぎちぎちと歯ぎしりする魔王。

だが、二人はそんな事にも気づかず

「もっと真面目にやって下さいな魔王様」

「そーですよお！そんなんじゃ全然駄目なんですからあ！！」

「やり直し！！！！」

本日8回目のやり直しを宣言されて

ブッソ

ついに魔王の中の何かが完全にぶちギレた。  
扉を蹴破り部屋を出て行く魔王。  
逃げたか？

ラプラスとファフニールは少しやり過ぎたかと残念そうな顔をする

だが、予想に反して再び扉が開き……  
入ってきたのは

ネコミミを頭に付け、体にピッタリと張り付くようなシャツと尻尾  
を垂らしたバイクパンツを履いた可憐な少女  
魔王は変身を解いてかなり際どい衣装に着替えてやってきた。

「……………う……………な？」

何故か勇者が真っ赤な顔して一番うるたえていた。

驚きの視線を無視してテープのスイッチを入れる魔王

“ さあ〜良い子のみんな！！ニャンニャン体操、はっじまるよぉ〜  
！！”

曲に合わせて身体を動かす魔王  
その表情に嫌がる様子は一切無い

手を前に出して誘うように握り

脚を擦りゆっくりと床に沈む



体の横で猫の手を作り

程よく膨らんだヒップを尻を尻尾を  
魅せるように動かす

音楽や踊り（体操） 自体は先程と全く変わらない筈なのに  
限りなく妖美な雰囲気醸し出している

うねる手足、

小さく揺れる胸元、

乱れる髪

体を動かし続けたせいか汗が滲み出て  
髪を伝い、背中を伝い、指先を伝い、空に舞ってキラキラと輝く、  
濡れた体が光を反射しヌラリと光る  
それが動きを余計に色っぽく見せる

四つん這いになり、鳴き声を上げる猫

脚を崩して胸元の両脇に手を充てて餌をねだる猫

尻を突き出し獲物を狙う猫

………尻尾をゆらゆら揺らす猫。

あまりにも過激な踊り（体操）に勇者は  
途中でふしゅー……と、真っ赤な顔で頭から湯気をたてながら目を  
回してしまった。

呆気にとられる三人（約一名鼻血垂らしてます）  
もう魔王の踊りに目が釘付けだった。

……それじゃ、みんなばいばい!!”

お別れの挨拶の後、曲が途切れると同時に顔面から完全に表情が消え失せた。

身体から漏れた魔力が黒い煙となり立ち込める。三人はぞぞつと冷たいものが背を這うような感覚に襲われた  
永遠とも思える沈黙  
終わった後の体制から……

ゆらありと立ち上がり  
ニコリと笑顔を向けた。

そして一言

「……………これで満足か？」

タイミングを見計らったように具現化した蛇のようにつねり牙を剥くどす黒いオーラを全身に纏い  
爽やかな可愛らしい笑顔とは裏腹に  
ドスの利いた野太い低い声でそう言った。

満足……つてか想像を遙かに越える魔王の踊り（体操）に文句などある筈はない

しかし、魔王の魔力に充てられて、返事を返せない所か指一本動かす事すら出来ない彼等は肯定する事も否定する事もできなかった。

二人の酔っ払いの酔いは当然の如く綺麗さっぱり消え失せていた。

唯一魔力に充てられないであろう人物は

隣で完全に目を回してノックダウンしてしまっている

「さて……次はお前らの番……だな？」

普段ならそんな約束はしていないと即座に、否定する所だが

今はそんな事ができる雰囲気ではない

下手なことを言ったら消される、そんな空気を孕んでいた。

この場の空気は完全に魔王の支配下だ

誰も逆らう事は出来ない。

「返事は？」

ギョロリと魔王の紅い目が睨んだ

「「「はいいい……！」「」」

その日は一日魔王城からニヤンニヤン体操の音楽が途切れる事は無  
かった……

## 20、ニヤンニヤン体操（後書き）

エロい描写なんて僕には無理でした……………

頑張った結果がこれだよ！！！？？

21、**勇者が城を去ったようです(前書き)**

ようやく、伏線回収

シリアスな展開に入ります。

## 21、勇者が城を去ったようです

魔王の罰ゲーム（むしろ部下への罰ゲーム）が施行された次の日の朝、勇者はベッドの上で悪夢にうなされるようにウンウンと唸っていた。

「う……………う……………」

昨日見せられた魔王のニヤンニヤン体操が頭から全く離れなかった。

あの、輝き、はちきれんばかりの笑顔（作り笑い）

上質な絹糸のように綺麗で滑らかな長い髪

陶器のようにツルツルと触り心地の良さそうなの……………少し朱のさした  
白い肌

腹から尻にかけての見事な曲線を描く括れ

勇者の頭の中で様々な想像が頭の中をぐるぐると回っていた。

風呂上がりで湯気を身に纏い良い匂いを漂わせる魔王  
ネコミミを付けて笑顔で擦り寄ってくる魔王を想像して……………

「……………う……………うがー！！！」

真っ赤に赤面して妄想を打ち払うように枕を振り回した。

いつたい、自分は何考えてるだ!!

と柄にも無く、パニックに陥り、混乱し、自己嫌悪に陥り始めた時

ポーチに入れていた石が紅く光り始めた。

その光を見て勇者は理解した。

自分がもう、

これ以上この場には居られない事を……

↓

「……………遅いな」

ニヤンニヤン体操の指導を受け

疲労困憊の部下達も起き上がり（疲れのせいか、みんなぼーっとしている）

普段に朝食をとっている時間が過ぎ、用意した食事が完全に冷めてしまった後も全く来る気配の無い勇者

不審に思い



勇者の部屋までやって来た魔王は

「おい、勇者いつまで寝て……」

だが、入った部屋には勇者の姿は無く  
外に面した窓が大きく開け放たれていた。  
部屋の机には一言、

“せわになった”

そう書かれた手紙だけが置かれていた……

「あー……言っちゃったんスね」

「……せめて、お別れの一言くらい言ってくれば良かったのに……」

勇者を慕っていた、ファフニールはしょんぼりと、肩を落とした。  
まだ魔術を教えて貰っている最中で勇者の突然のお別れに納得がい  
かなかった。

「所詮、身勝手な人間だったって事ね」

「それは……」

ラプラスは珍しく毒のある発言をした。

それは、どこか勇者に期待を裏切られた事に落胆したようなそんな  
気配が見受けられた。

「ふん……居なくなつてせいせいした」

元々、勇者が魔王城に住んでいること自体おかしかったのだ  
勇者は魔王を倒す存在、同じ屋根の下に居て良い道理は無い。

いつかこんな日が来るのは分かっていたし、自分自身もそうなる事  
を望んでいた。

少し変化はあるが、ただ前の生活に戻つただけで、別に気にする必  
要も無い……

努めてそう理解していたが……

しかし、それからというものの

魔王はどことなく、イライラしっぱなしだった。

執務室での書類のサインの時

書類を十枚も破ってしまい

ペンも三本も曲げてダメにしてしまったし。

また、ちよつとした事で怒りやすくなり

口数も減った。

それが何処から来る感情なのか魔王にはとんと見当がつかなかった。最も、もし気づいていたとしても魔王はそれを認め無かっただろうが……

昼飯時には、うっかり五人分の食事を作ってしまった、  
…その場で一人分をごみ箱に叩き込んだ。

そんな事があって、その夜、魔王は自身で料理を作る事をやめ、影から作り出した分身に任せてしまった。

作る料理はまずくは無いものの魔王自身の料理と比べると物足りない感じが否めない。

魔王は怒涛の勢いで仕事を終えてしまって、もう、やるべき仕事も無いのに執務室に籠りつきりで出てくる気配が無い。

いや、勇者が来る前はいつもそんな感じだったが……

どことなく寂しい雰囲気 of 魔王城

次の日

「勇者さん……なんで行っちゃたんでしょうか？」

「やあてね……」

興味が無い、とばかりにぞんざいな返事をして朝からチエスに勤しむラプラス

つまらない顔をして駒を動かした。

チエックメイト……

しかし、何の感慨も湧かない

一応、仕事の受け持ちを賭けているのだがこんな状況で盛り上がる筈が無い

勝とうが負けようが意味は無い

ただ暇を潰すだけの空虚な時間

「次の当番、よろしくね……」

そう言って、駒を並べはじめた。

「……………」

何故勇者が去つたのか

その理由は誰にも解らなかった。

……………ただ一人を除いて……………

昼前、チエスを切り上げて

数日前、勇者が探索の魔法陣を使ったその場所にマンテイクは居

た。

実は、なにかしら思う所があったのだ。

「……………」

周りに人が居ない事を確認して

マンテイクは行動を起こした。

それは、ある人物と同じ波長の魔力を  
城の中でちらつかせる

……………ただそれだけ

しかし、それで十分だった。追いかけてつことを続ける二つの大きな魔力  
追っていた方の魔力が一瞬動きを止めて、再び追うように動き出し  
たのを感じ

試みが成功した事を確信した。

「全く……………男は辛いねえ……………」

ニヤリ、と口元が闇に輝いた。

その夜、ファフニールが城を巡回している時、気配も無く正面から  
現れたのは

紅い鎧の勇者

また、新しい勇者か……………と呆れた顔は、瞬時に真面目な顔へと切り  
替わる。ファフニールの第六感がこの存在が危険であると警報を鳴

らしていた。

冷や汗を垂らしファフニールは即座に城中のワームを手元に呼び寄せた。

幾百、千のワームが次々とファフニールの幼い身体をはい上がり、張り付き、瞬く間に硬化していく、

B級ホラーのような異様な光景

ものの数十秒で身長三メートルを越える石の巨人が現れ、侵入者を排除するためにその巨大な腕を振り落とした。

22、魔王とヤンデレな勇者(妹)前編「妹がやって来たようです」(前書き)

コメディ無し&amp;mp;ちょっと長めです。

前後に分かれます。

22、魔王とヤンデレな勇者（妹）前編「妹がやって来たようです

昼の事……

何処からか帰ってきたマンティークは、何故か機嫌が良かった。  
何があったかは知らないが  
険悪な雰囲気の中にも関わらず  
鼻唄まで歌っていた。

そんな調子でチエスの勝負で当番を押し付けられた、お偉いさんへの  
今月の城内状況の報告のため出掛ける準備を始めていた彼だったが

「あー、そうそう……ファー……今日、城の見回りだったよね？」

不意にファフニールに話し掛け

「もしかしたら、深夜に迷惑な客が来るかもしれないから……一応  
注意しといて」

意味ありげにそう言って、部屋を出て行った。

……まさかこの人がお客さん……なわけないですよ



昼間にあつた出来事を考えながら

鈍重なる巨人という名に相応しく無く

その巨体からは想像も出来ないようなスピードで攻撃を繰り返して  
いた。

本来の彼女にこれ程のスピードは無い

ワームと同化し、具現化した巨大な身体は完全にファフニールと一  
体化しラグタイム無しで自由自在に動き回ることが出来る  
しかし、その巨体故にどうしても鈍重な動きとなり

それではこの相手に対応出来ない事は即座に理解していた。  
そのため、勇者に教えて貰った魔術で身体能力を上げスピードを補  
っていたのだ。

完全に殺る気満々のファフニール

籠める一撃一撃が全て全力で一切の手加減は無い

並の勇者なら、避ける事も出来ず数秒でのされるであろう攻撃。

だが、相手はヒラリヒラリとファフニールの攻撃を嘲笑うかのよう  
に避けていく

当たる気配の無い攻撃

魔術の補助があるにも関わらず

身体が悲鳴を上げる……が

それでも攻撃を緩めなかった。

“これを魔王に会わせる訳にはいかない”  
攻撃を止めたら殺される…

それ程までに、ファフニールはこの存在を危険視していた。

次々と凹む城壁

相変わらず当たらない攻撃、

暴れ回っている事で相手も近づけないようだ

だが、ここに来て慣れない魔術に突発的な激しい運動  
無理をした事が祟り

ビキッ

「……………あ」

腕が攣ってしまった。

ヤバい

と思った時にもうは既に遅かった。

瞬時にその腕を足場に

ファフニールの背中に飛び乗り、

一切の躊躇もする事無くその切っ先で彼女の腹を貫いた。

執務室にて……

ギィ…ギィ…

魔王は行儀悪く机に足を乗せて椅子を前後に揺らしていた。勇者が去ってから暇を持って余し、ふて腐れている魔王……一向に気が晴れる気配は無い。

そんな所に執務室の机の端の水晶が輝きだした。侵入者を知らせる信号だ。

「……………」

魔王は空間を繋ぎ執務室から祭壇へと降り立った。

昔から繰り返してきた、いつも通りの出陣

正直、今の魔王は勇者との戦いなど気が乗らないが魔王が勝負をほつり出すなど以っての外だ

玉座に座り、勇者が来るのを踏ん反り返りながら待った。

あと、どれぐらいかかるだろうか……

大体の勇者は最深部にたどり着くまで

短くて2時間、長い場合だと半日以上かかる

それは、侵入者を感知した城が様々なトラップや障害を出現させ、

自分の分身が速やかに侵入者を迎撃体制に入るからであり  
たどり着くまでに息絶える勇者も少なくない

城自体が複雑な構造をしている事も勇者の足取りを阻むも一つの要因だ  
だが……

バゴン

爆音と共に扉と青い影が後方に吹っ飛ばされたのを見て………魔王  
は目を見開いた。

「う………」

扉と共に吹っ飛ばされたのは、力を解放し透き通る透明な肌を持つ  
青い人魚の姿をしたラプラスだった、扉のあった場所には手を翳  
す紅い鎧の勇者が居た。

城に来た新たな勇者がラプラスごと扉を破って押し入って来たの  
だ。

「な………」

思わず玉座から立ち上がった。

驚くのも無理はない、侵入してからまだ15分も経っていないのだ  
から

見ればその紅の勇者の横で、腹から血を流し体中痣だらけで息も絶  
え絶えなファフニールが赤い髪を掴まれ引きずられていた。  
目が虚ろで焦点が合っていない

恐らく、何らかの術で操られ道案内をさせられていたのだろう

「ふん……」

もう用は無いと放り投げ、留めだといわんばかりに魔術を放った。

……が、素早く羽根を生やした獣人、マンテイクがファフニールを胸に抱き抱えその攻撃を掻き消した。

「つぶねえ」

舌打ちをし、まあ良いと魔王に向き合った紅の勇者。

冑を脱ぐと

冑の下から現れたのは白髪、碧眼の少女

まだ成人していないであろう幼い顔立ちとは相反して憎悪、侮蔑、嘲り、少しの狂気を孕んだ目が魔王を睨んだ

そして魔王に問うた

「クリスお兄様は何処？」

「……………クリス？」

「惚けないで……」に居るのは判ってるの……」

どうやら人を捜しに来たらしい。

ついこの前去って行った勇者の事か？

……にしては歳が近すぎる気がする

何にせよ、この侵入者の質問に答えるつもりも話をするつもりも無かった。

「誰だか知らないが……」

「なら、力づくで聞き出すだけ」

言い終えた時には、既に魔王の目の前に接近していた。

「!？」

閃光の如きの一閃を紙一重で避け、間を置かず迫る二撃目を跳んで回避

後ろの玉座は無惨にも粉々に砕け散った。

相手が女だと完全に油断していた。

常軌を逸したスピードの攻撃に固唾を呑んだ。

いったい彼女が何なのかは解らないが  
ただ一言、言えるのはこの勇者が相当の実力の持ち主であるという  
事だ……

魔王は、手近に転がっていた、装飾用の槍を引つつかみ、突っ込んだ。

「魔王様！！」

魔王に加勢しようとしてラプラスとマンティークが近づこうとしたが無駄だった。

刃が交えた瞬間に繰り広げられる猛攻

目にも留まらぬ、打ち合いの末に

移動しながらの数十、数百の魔術による弾幕戦、

弾幕が緩まった所への不意打ち、

瞬時に展開される防御壁、

すかさず繰り出される反撃、

カウンター、回避……

次々に変わる戦況……

もはや、彼等が手を出せる領域ではない、こちらに被害が回らないようにするのが精一杯だ

次元が違う。

一見互角にも見える戦い、しかし実際はそんな物ではないと戦っている魔王自身が一番よく判っていた。  
手加減されていると……

いつも戦っているから解るが全力でかかって来る敵は少なからず緊張が見られ攻撃の質も均一でムラが少ない（全力だからこそそれ以上もそれ以下もない）が、この少女には全くもってそれが見られない  
それにどの攻撃も一撃で魔王の命を奪うものはない、

完全に嘗められている

証拠に、今の魔王の出せる限りの力を使った攻撃を受けても彼女は  
余裕な顔だ

本来の力を使えば良い勝負になるのだろうが、魔王としてのプライドがそれを許さなかった。

勇者との戦いで力を解放なんかしない  
ワザワザ正体を現す必要なんか無い

魔王の頭はある種の強迫観念、に支配されていた。

相手の放った風の刃を同じく風の刃で相殺し、続けて氷結の魔術で  
相手の動きを封じようとする

が、素早く飛びのき、幾つもの光の矢を放つ

防御壁で受け止め、幾つもの闇の剣を頭上に降らせる、それを器用  
にかわし猛スピードで迫る敵

牽制しようと炎の球をぶつけるが、相手はその炎を全くものともせず  
に突っ込み



……魔王は肩を貫かれた。そして、傷口だけでなく全身を駆け巡る激痛、その痛みに魔王は覚えがあった。外部から異質な魔力を流される感覚。ただ、違いはその痛みが相手をいたぶり、苦しめる、悪意の籠ったものであるという事。気絶するギリギリの所で生かさず殺さず痛みを与える

「吐く気になつた？」

剣を深く減り込ませながら再び、魔王に声を掛ける、

「……………！！つが！あ！」

魔王が痛みに声にならない叫びを上げる

まるで虫けらでも潰すように傷口をえぐる少女

何時まで続くかと思われた蹂躪は

魔王と紅の勇者の間に出現した光の壁によって止められた。

突然の第三者の介入に警戒するが

入って来るその姿を見て少女の顔が一気に綻んだ。

「お兄様！！！」

それは昨日の朝、出ていった、勇者その人だった。

しかし、魔王城の四人とは誰とも視線を合わせようとはしない

まるで、周りには誰もいないと自分にそう言い聞かせていたように  
小走りで近づく少女に勇者は周りを努めて無視して話し掛けた。

「……………クレア……………帰ろう」

途端にパアツと夢心地の笑顔を浮かべて、頷いた。先程の戦いが嘘  
だったかのように、少女は完全に少女だった。

「待ってて下さいね、今ソイツに止めを刺しますから」

今、魔王は流された魔力のせいで身動きがとれない  
今の魔王なら、簡単に殺せるだろう  
まるで屑籠にゴミを捨てようとするような感覚で止めを刺しに向か  
う彼女を……………手で制した。

「……………ダメ……………だ」

訳が解らないといった顔の少女に勇者は  
まるで懇願するように言った。

「……………魔王は……………友達……………だから」

そう言った

「う……………嘘でしょ、お兄様!!??」

信じられないと驚きに目を見開き  
否定する事を期待して兄を見つめる少女  
だが、期待する言葉は返ってこない。

「そう……………わかりました……………」

少し陰りを帯びた彼女は、  
ゆっくりと勇者……………クリスに抱き着き、  
と同時に電撃がほとばしっ  
た。

「……………!??」

思わぬ不意に避ける間もなく、勇者はその場に気絶した。  
少女は優しく抱き抱え兄を床に寝かせる

顔を魔王らに向けると

「……………そういう事なのね……………お前らが兄様をたぶらかしたのか」

力が渦巻き、少女は顔を凶悪に染め

もはや、釈明の予知は無いとばかりに睨む

ただならぬ殺気は、誰も生かしては帰さないと暗に示していた。

「もう、生かしておく理由も無い、楽に殺してやろうと思ったけど……………最期までいたぶって苦しませながら殺してやる」

それまで勇者が居たことで静観していた二人は危機を察知し一気に襲い掛かった。

ラプラスは、無数の氷の弾丸を身に纏い

マンティークは、高圧電力をその手に溜めて

だが、攻撃は届くこと無く、見えない力によっていとも簡単に弾き飛ばされてしまう。

壁に激突して二人は崩れ落ちた。

もう戦力は無い……………絶体絶命の危機……………にもかかわらず

「ク……………ククツ……………」

その場には相応しくない笑い声が魔王の口から漏れ。

「アツハハハハハハハ！……！！！！！」

ついには本当におかしそうに腹を抱えて笑い出した。

突然の魔王の笑いに少女は不快に眉を歪ませた、痛みのみならずあまり気でも狂ったのかと見つめたが

「ハ、まさか……勇者が魔王に向かって友達とはな……とうとう俺も魔王らしく無くなってきたなあ……」

その時になって少女は魔王の異常に気づいた、肩に空けた風穴がいつの間にか跡形も無く消えていたのだ、それだけでは無い、徐々に変わっていく魔王の姿

「まあ、本当に今更だ……今この場で魔王らしさを語るなんて馬鹿馬鹿しいにも程がある」

魔王の内包する魔力が恐ろしい程に膨れ上がっていくのを感じた。

「安心しろ……最っ高に手加減してやる」

漂う王者の風格……………

そうやって“彼女”は少女を見下ろした。

23、魔王とヤンデレな勇者(妹) 後編「調子に乗りすぎると痛い目に合う」前

内容とタイトルがあまりにもミスマッチな気がしたので  
メインタイトル変更します。

……最初考えてたのと大分変わっちゃったなあ……

迷走した結果がこれだよ!!!

23、魔王とヤンデレな勇者（妹）後編「調子に乗りすぎると痛い目に合う」

いや、本当に軽い気持ちだった。

数日前の出来事から勇者ツチが城を去ったのは、あの紅い鎧の騎士が関わっているのは解りきっていたんで。

だから、その原因自体に来てもらって話し合うなり、戦うなりして解決を図ろうかな〜と軽く思ったのだが

まさか、来るなり問答無用でファーが半殺しにされたり、魔王様が窮地に追い込まれるなんて思ってもみない事態に……………。

いや、戦う事自体は予想の範疇にあったが相手の力が強すぎる！！！！

あげくの果てに、勇者ツチを気絶させてこの場の全員を皆殺しときた。勇者ツチを気絶させた時点で警戒をマックスにした俺とラーサはその台詞を聞いて出来うる最大の攻撃で相手を迎え撃ちにいった訳だけど……………触れる事すら出来ずに一瞬で弾き飛ばされてしまった。

急激に遠退く意識、

……………スンマセン魔王様、

自分の軽率な行動を呪いながら

気絶する直前に見たのは立ち上がる魔王様の不敵な笑い顔だった。



膨大な魔力が、収束して黒いオーラとなり魔王の身を纏う、腰まで伸びた長い黒髪に燃えるように赤い灼眼の少女、魔王が本来の姿を顕した。勇者少女…クレアは始めの方こそ、急に膨れ上がったあまりの力の渦に圧倒されたが……冷静に観察し、その力が自分の力と同程度であることを認め今はそれよりも自分が手加減されていた事に怒りが先立った。

「女だったとはね……まさか……その体で、誘惑でもしたのかしら？……この売女」

ビキリと血管が浮かび上がる

「誘惑？……あいつが勝手に此処に居着いただけだろうが」

魔王にとっては事実を述べただけで別に他意のある発言ではなかったのだが向こうはそうはとらなかつたらしい

「……………殺す」

頭上に幾千もの剣が現れ

魔王のもとに容赦無く降り注いだ

「ア？ここまで好き勝手やっついて、逆ギレか？……上等だ！！」

手を翳した途端に剣の雨を尽く砂よりも細かい微粒子に変えてしまう瞬間、足元に黒い影が現れ闇で作り上げた槍が次々と突き上げていくそれを曲芸のようにかわし後ろにさがる

壁際まで追い詰められ床に手を添えると床に幾重にも線が伸びてボコボコと影もろとも床石を押し退けて木の根が魔王を縛りつけるが…

途端に魔王の全身を炎が包み、木の根を焼き払った

木の根で遮られていた視界が開けたと同時に魔王へ向けて剣を振り落とされる

魔力を籠めた一撃を魔王は手元の槍を強化し、軽々と防いだ。

「この雌豚が！！」

「は！！、じゃあその雌豚にも劣るお前は一体何だろうなあ？」

飄々とした態度で剣を跳ね退け、次から次へとやって来る高速の攻撃を捌き返事を返す。

直接的な力に関していえば二人の間の実力に大きな差は無い  
…… 攻撃を受けている魔王に実際はそれ程余裕など無いのだが  
余裕があるフリをすることで相手の精神を削り戦闘の優位性を保つ  
ているのだ。

精神的優位性を示す事はそれだけで相手の体力を削り自滅を誘い、  
その分自分の体力を温存できる  
そしてクレアは知らぬ間にそれにまんまとはまって、完全に魔王の  
ペースに乗せられている。

「お兄様は、私だけを……私だけを見ていれば良いのに！！お前が  
余計な事を！！」  
攻撃する手を緩める事無く叫び声を上げた。

「俺は何もしていないが？原因があるとしたら単にお前に魅力が無  
かっただけだろう？」

「……！！」

痛いところを突かれて思わず顔を歪め、攻撃する手が止まる

「っ……お兄様は私の物……誰にも渡さない！！魔族の畜生」  
……渡してたまるか！！」

再び動き出した手が怒りに呼応して、剣の速さが上がっていく

「たかだか十数年そこらしか生きていない人間の餓鬼がよくいうなあ！！」

突然突き出された魔王の槍の柄が

攻撃する剣の間を抜い、懐に潜り込み

腹を突き、身体が勢い良く後ろに吹っ飛んだ

頑丈に出来たハズの紅い鎧が凹む

怒りで血走りはじめた目をギラギラさせながら立ち上がった彼女は

『断空の……歪み！！』

そう言つて剣を大きく縦に振り落とすと

空間に黒い割れ目が生まれとてつもない速さで魔王に迫る

断空の歪み……

次元を越えて物質、空間という概念を断ち切る究極の刃、存在そのものを断ち切るこの技の前にはいかなる防具もどんなに高位の防衛魔術も無意味だ

防ぐ手だてはただ一つ

「はっ！」

衝動する寸前、魔王は指で目の前の空間を切り裂いた。ポツカリと空間に穴が空き、断空の歪みを飲み込む。断空の歪みを防ぐ唯一の手だて……それは相殺

同じ或はそれ以上の力で創られた断空の歪み、それを衝突させる事で互いに互いを飲み込み対消滅を起こすのだ

「今ので終わりか？随分とお粗末な攻撃だな？」

本当はお粗末所か並の人間なら一生かかっても習得するのも難しいかなり高等な技であるが  
内心ちよつとビビったのを隠すように  
あくまでも余裕な態度で高圧的に言葉を並べた。

「その程度でそいつ（勇者）を自分の物だと？……はっ………寝言は寝て言うんだな………阿婆擦れが」

ぷつり

と今の言葉が彼女の精神に完全に止めをさし彼女の中で“切れてはいけないなにか”が切れてしまった。

儼の人形のように突っ立ち、顔から表情の完全に消えうせた少女は

そのままゆつくりと手を頭上に挙げて……ぶつぶつと長い詠唱を始めた。

次は何をやるのだろうかとう面白そうに（半ばドキドキしながら）眺めていた魔王の顔は少女の手に現れた部屋全体を隈なく白く照らし輝く丸い球を見て

瞬く間に青く変わっていく。

「おいおい………」

光り輝くのは偽りの太陽の光

絶えず核融合を繰り返す恒星の破片だった。

死ね死ねしねシネしねシネしね死ね、

ぶつぶつと今度は怨嗟の言葉を呟き続ける少女………

もはや怒りで完全に周りが見えていない

或はアレがどういう物なのか解っていない。もし“アレ”を解放させようものなら、ここに居る全員、城どころか、この周囲一帯数十キロの範囲が完全に焦土と化すだろう

「……消えて……失くなれ」

彼女がそう叫ぶと同時に

魔王は頭で考える間もなく、出来る限りのスピードとあらん限りの

力を使い瞬時に異次元空間を作りだし

光の球が解放されるまさにその瞬間、膨大な熱を放ち光り輝く塊を覆い被せ、封じ込めた。

空間を閉じる直前に漏れた僅かな光が突き抜け、当たった石の壁を一瞬でバターののようにドロリと溶かすのを見て

「……………」

本当に危ない所だったと滝のように冷や汗をかいた。

あと数秒でも、封じ込めるのが遅れていたら絶対に間に合わなかっただろう

本当にギリギリの死線をくぐっていた事を実感した。

なおも魔王に立ち向かおうとする少女は……………今ので最後の力を完全に使い果たしたらしく、その場に倒れ込んでしまった。戦いは魔王の勝利に終わった……………

しかし、魔王にはまだやるべき事があった。

「後片付け……………どうするか……………」

再び穴だらけになり、朝の……………本物の日差しが城の奥まで届いてるのを見て  
ゲンナリと呟いた。





## 24、勇者な友達

「……………っん……………」

目が覚めると勇者は見慣れたベッドに寝かされているのに気がついた、寝起きで暫くの間、思考回路が止まったままの勇者だったが、気絶する前にの事を思い出し顔を青くして、起き上がった。

魔王は？……………あの後一体どうなったのか？  
何故ここに寝かされていたのだろうか？

疑問はすぐ隣を見て直ぐに解決した。  
魔王はベッドの隣の机の上に肘をついて涎を垂らしながら船を漕いでいたのだ。

「……………んあ？…勇者…起きたのか」

勇者が起き上がった事に気づきうたた寝して目を擦りながら、語りかけてくる。

間の抜けた顔を確認して一つ心労が減る  
だが……………

魔王が無事なのは解った。

しかし、妹の方はどうなったのだろうか？

今度は妹の事が気にかかる  
戦いは恐らく魔王が勝ったのだろうか……  
まさか…殺してしまったのか……

「……安心しろ、別の部屋に寝かせてある」

そんな疑念を察知したのか、魔王はそう告げた。  
どちらか無事であることを知り、ようやく勇者心から安堵した表情  
を浮かべた。

「……………ありがとう……」

あんな事をされたにも関わらず、妹を生かしてくれた事に感謝した。

「お前の名前ってクリスって言うんだな」

今まで名乗った覚えは無い自分の名前を魔王の口から出たのを聞き  
何故それを……と勇者は目を見開く

「いや、お前の……妹？……が呼んでたからな」

納得したように頷く……………と

今度は不機嫌そうにジトジトと睨んで

「……………そっただけ名前知ってる……………」

一方的に名前を知られたのがよほど勇者には気に入らなかつたらしい  
何処の子供だと突っ込みたくなるような言い草だ  
しかし、

「……………確かに公平じゃ無いな」

相手の名前を知っておいてこちらの名前を名乗らないのは礼儀を欠  
くだろう

「俺の名前はナディア…ナディア・クラウドだ」

生まれた時に授かった名前を…今まで自分からは誰にも名乗った事  
の無い名前を誇り高く述べ上げた。

「……………かわいい名前なのな」

正直な感想を述べる、魔王ならもっと厳つい名前を想像していただ  
けに実際の名前とのギャップを感じた。

「……あまり嬉しくないな」

畏れられ畏怖されるべき存在の魔王への褒め言葉（？）に可愛いは微妙だ

そんな事を思いながら苦笑い……

「ま、お前は気に入らない奴だが……友達としてなら少し認めてやるよ」

そう言つてニコリと笑い

勇者に手を差し出した。

突然差し出された手に一瞬微妙な顔をして戸惑ったように視線を動かしていたが、何か意を決して。

「……………ん」

勇者はその手をしっかりと握り返した。

## 24、勇者な友達（後書き）

これから更に更新頻度が下がりそうです。  
短めに済ませるつもりだったのに結構長くなってしまった……

……最後まで書き切るかなあ

どうか、生暖かく見守っててください

25、触手プレイ？（前書き）

基本エロ無し

ただし最後の方に怪しい表現あり

## 25、触手プレイ？

コロシテヤル……

誰もが寝静まった深夜、誰も居ない城の廊下を音もなく駆け抜ける人影があった。

目が覚めると同時に、自分をベッドに縛り付けていた縄を切り、部屋に居た魔王の影のシモベを消し去った勇者少女クレア。

一度は敗北してもなおその目から狂気が消える事は無かった。

先の戦いで殆ど使い果たし、僅かに残った力で城の魔力を感知し、魔王の寝る部屋を探し当てると……ゆっくりと侵入し。

目標の影を視認する……

気配を潜めて近づき……この世から、自分と兄を隔てる障害を消し去るため、静かに寝息をたてる魔王の喉笛に部屋から拝借した銀色に輝くフルーツナイフを突き立てた。

しかし……

チクッ

「……………」

虫に刺されたような皮膚の痛みの後に、身体から力が抜けて痙攣し、その場にひざまづいたまま動けなくなってしまうた。

「全く……魔王様は油断し過ぎなんだからねえ……」

見れば人間のラプラスが背中から触手をウネウネと動かしながらいつの間にかそこに居た。

「……い……ぜ……？」

何故解ったのか？そう聞こうと口を開くが身体が痺れているため上手く喋れない。

「暗殺なんかは私の得意分野だからねえ、あなたみたいな娘が考える事も何となく解るのよ」

相手が満足に喋れなくても言いたい事を察したラプラスはそう答えた。

「……全く……せつかく“あれ”を無かったこととして命を取らずにしてあげたのに、こういうのを恩を仇で返すって言うのかしら？」



いまだに血気盛んなこの少女に呆れたように呟く……

「うる…い…げせ…な、まも……」が

身体が痺れるのも構わず声を上げた。ハッキリと声を認識する事は出来無くても罵声を浴びせていることは解る

まるで虫けらを見るような目をこちらに向けてくるクレア、こんな状況でもなお自分の立場が上だと信じて疑っていない。

きっと彼女は今まで甘やかされて育ってきたのだろう……

世の中の全てが何でも自分の思い通りになると勘違いしている。

好きな人が側に居ないと気に入らない、だから縛り付ける。

嫌な奴が生きているのが気に入らない、

だから殺す。

なまじ力を持っているだけに達が悪い

魔王との戦いだって

本人は負けたとは思っていないのだろう

だからこそこの高圧的な態度

負けた事が受け入れられずに駄々をこねる子供

見苦しくわね……

ラプラスの青い瞳が怪しくギラリと光った。

途端に背中から生える悍ましい量の触手。

「勘違いしないでね……？貴女が生かされて居るのは、私達の気まぐれだつて事に……いくらあの子の兄妹だとしてもそう何度も殺しに来るようなら例え魔王様が止めようと容赦しないわ……なんなら今この場で殺してあげましょうか？」

さも楽しそうに薄ら暗い声でそう告げた。

一瞬うつろたえそれでもなおも強気のクレア

先端に鋭利な針のついた幾つもの触手がうねり、首に脚に腕に体中に巻き付き纏わり付き縛り上げてゆく  
ゆっくりと締め付けられる身体に徐々に恐怖が顔に滲み出る、それでもギリギリの所で踏み止まり態度を崩さないのはプライド故か

チクッ

「……………」

上腕に釘で貼付けられるような痛み

……見れば毒針に刺されて赤く爛れていた

……そして、後に控える数百の無数のうごめく触手

「これ……一本ずつ刺していったらどうなるかなあ？」

瞬間、想像する。

一本ずつ針に刺され、苦痛に苛まれ悲鳴を上げる自分を……全身を醜く腫れ上がらせ最早人の形を成さずに苦痛の中で死にゆく自分を

「う……っ……あ」

もう限界だった……

もはやプライドも外聞も無い

目からは大粒の涙をボロボロと垂れ流し  
恐怖に顔を歪ませて泣きじゃくるクレア

「おっ……にい……ひゃ……ん」

ただ兄に助けを求める力無い……か弱い妹の姿があった。

その様子に満足したのか、ゆっくり触手の力を弱めて針を引っ込める。

顔を涙でグシャグシャにした少女を見下ろし……

「まあ……今回は貴女のお兄さんに免じて……」

次いで先の丸い触手が少女の服の中へと潜り込み身体をまさぐる。

「……っひ……!？」

「ふふふ……ちょっと悪戯するだけで許してあげるわ……大丈夫……  
痛いようにはしないから………」

先程、毒針で腫れた部分を優しく撫で上げ、ぺろりと舐める。

「……………っ……！??？」

そのまま触手に絡まれて訳もわからず人気の無い部屋に連れ去られる少女……………

その夜、城の中で熱っぽい声が響いたとか響かなかったとか……………

クレアは少し大人の階段を上った。

26、好きな奴がいれば嫌いな奴もいるそうです

「……ん」

気持ちの良い陽が挿す

いつも通りの朝、ベッドから起き上がった勇者は食事を取るために食堂へ向かう。

ホットケーキが甘く焼ける良い匂いを嗅ぎながら中に入った勇者は

「……………っ……………」

花柄のエプロンが似合う魔王の姿（ ）が居た。

普段の魔王は女の姿を余り見せない、というか見せたがらない雰囲気を出していたのに

「お、起きたか」

今日の魔王は全く気にしていない表情だ。

「……………魔王……………その姿……………」

「ん……………？ああ、これか何だかイチイチあの姿になるのが面倒なんでな……………何か問題あるか？」

問題は無いが……いや、大いにあるか  
そうやって料理をする姿は魔王のそれではなく、最早新妻のそれだ。  
魔王としてそれは如何なものか

まあ、城の中には身内しか居ないから良いのだろうか……

日に日に魔王らしく無くなっていく魔王の姿を見て  
魔王をそんなにした理由が自分にある等とは知らず、勇者は自分の  
事は完全に棚に上げて思った。

……もう魔王なんて辞めてしまえよ……と

「魔王様、お早うございます!」

と、そんな事を考えているとラプラスが妙に色艶の良い傷一つ無  
い肌を曝しながら中に入ってきた。何故か元氣いっぱいである……

昨日、思いつ切り吹っ飛ばされて満身創痍だったはずなのだが、  
そんな様子は一切見られない

水の魔物は回復に秀でているとはいえこの早さは異常だ、昨日の晩  
に何があつたのだろうか？

そんな疑問を頭に茶を含む魔王と勇者

だが、後ろから大人しくついて来る内気な雰囲気の少女の姿を見た  
途端、勇者と魔王は口に含んだ茶を盛大に吹き出してしまった。

城に乗り込んで散々暴れ回り、城の中をめちゃくちやにした襲撃者、  
勇者の妹クレアさん(?)がそこに居た。

「…ゲホ、な……なんでそいつが居る」

確か個室の中に縄でベッドに縛り付けていたハズなのに……

「偶然抜け出している所を保護してあげたのよ……、ね」

ラプラスに言われるがままにクリアはコクリと頷いた。顔がどことなく赤い

いったいどうやってたら“偶然”あの堅く縛られた縄を抜けてこられるのかとか。

何で今まで報告しなかったんだとか。

イロイロと聞きたい事はあるが……

一番気になるのは……

「……… いったい、その猛獣をどうやって仕付けたんだ………」

この城に来た時は魔族の事を思いつ切り見下していたハズなのに、今はそんな様子が全く見られない。知らない間に一体何が起きたのだろうか？

「仕付けるなんて人間きが悪いわぁ魔王様、この子はこんなに可愛いのに………」

そ、と撫で上げると少し嫌がるそぶりはあるものの、大人しく撫でられている。

ええええ……………、

本当に何をやったのだろうか？

……………隣では勇者が“そんなばかな”とかぶつぶつ呟いている。

勇者が……………今まで自分がどんな事をしても大人しくならなかった妹を……………ラプラススが会って一日も経っていないにも関わらずきちんと言うことを聞かせてる姿を見て情けないやらなんやらで……………

兄としての面目が丸つぶれ

どうやら本気で落ち込んでいるらしい

そんな、勇者を見て魔王はため息一つ

「情けない……………お前は自分の身内の事になると、ここまで腑抜けなのか？」

魔王が呆れるように言った瞬間、クレアは魔王を怒りに満ち完全に据わった目でギラギラと睨みつけた。

「お兄様を侮辱するな……………」

あー、そこは相変わらずなんだなと変わらないクレアの反応に安心するやら嘆息するやら……………



「ふふふ……優しくして自慢のお兄さんだものね……」

ラプラススはクレアをモフモフと抱き着き頬つぺたを突つつき始めた。

再び大人しくなっていくクレア

「……もう何も言うまい……」

食事を終えた魔王はホットケーキとは別に作った粥を手に、ファフニールとマンティークの居る治療室へと向かった。

魔王の影が黙々と治療をすすめている。

「調子はどうだ?」

部屋に入った魔王は

腹に空いた穴も塞がり顔色も良くなったファフニールと、大した怪我でも無く比較的元気そうなマンティークに声をかけた。

「魔王……さま……」

「あ、おはようございます」

「

「頭がガンガンしますけど、平気です」

それはなにより……と  
二人に皿を渡すと

「食事は食えるか？」

「はい、どうにか……」

ファフニールはそう言って食事に手をつけるものの、スプーンを掴むのすらに苦労している姿に見かねた魔王が手を差し出す

「仕方ない…… 食わせてやる」

「ああ！！ずるいッス、ファーだけ、えこ鼻屑して！！俺にもアーンしてくださいよ！！アーン！！」

いきなり不公平だと叫び声を上げ騒ぎ立てるマンティーク、無視を決め込んでいた魔王だが余りのしつこさに……

バチン

……………部屋の中に光が走ったと思った瞬間、先程までベッドの上に横たわっていたマンテイクは真っ黒い炭へと変わり果てていた。魔王による雷の魔術だ、生きているかどうかかなり怪しい状態だが、電気属性の彼ならきつと大丈夫なはずだ（希望的観測）

そんなこんなでファフニールに粥を食べさせていると

食事時のように入ってきたのはラプラスと……………後からついて来るクレアだった。

「……………ひっ」自分を半死に追いやった相手の突然の登場により恐怖で顔を引き攣らせる  
「……………緊張の中クレアが足を進ませて

ファフニールの前に来ると

「……………ごめんなさい……………」

ボソリと小声でそう告げた。

「……………へ？」

そう間抜けな声を出したのは誰であろうか……………

「みんなに謝りたいんだって」

どんな理由であれ、ここまで酷い事をするべきではなかったと本人も反省したらしい、

なかなか可愛い面もあるじゃないかと感心する

黒焦げになってもう聞いちゃいないだろうというマンテイクにも一応謝罪の言葉を述べて

最後に残るのは魔王なのだが……………

之までで一番嫌そうな顔をしながら、物凄く反抗的な目を向け魔王の前に来たクレアは……………  
暫し沈黙した後

「しね」

そう言うと目にも止まらぬ速さで魔王の腹を蹴り飛ばしてそのまま何処へともなく去っていった。  
避ける間もなくすつころげて間抜けな姿を曝してしまった魔王。  
周囲があっけらかんとしている。

「ま……………魔王様？」

余りの事に反応の遅れたラプラス

仰向けの状態から起き上がり魔王は額に青筋を立てて思った……………

あいつとは一生仲良くなれそうに無いな……と

「上等だ！！糞ガキ！！」

その日勃発した女同士によるバトル& a m p ・チエイスは夕方まで終わる事は無かった。

二人とも……よくやるよな……

26、好きな奴がいれば嫌いな奴もいるそうです（後書き）

久しぶりの投稿、一段落ち着いたら気が抜けました。他に執筆中の小説があるので更新はこれからもっと遅くなりそうです。

27、ケンカをするほど仲が良い？（前書き）

駄文&amp;amp;内容短めです

## 27、ケンカをするほど仲が良い？

城中に響き渡っていた破壊音が収まった事を確認し、結界を解除し  
部屋から出た

勇者ことクリスが見たモノは

「はあ、はあ……………」

「……………ぜえ……………ぜえ」

半日に及ぶ激しいバトル& amp ;チエイスの末に疲れ果てて、息も絶え絶えに汗を滝のように流し  
土まみれで中庭の地面に横たわる魔王とクレアの姿だった。

「……………馬鹿？」

お前ら馬鹿だろ？馬鹿なんだな？、と冷たい視線、その顔には多少の怒りが交ざっていた。

普段は、感情をあまり表に出さない勇者だが半日もの間辺り構わず魔術や武器をぶっ放され、その騒音と壁を突き抜けて飛来して来る流れ弾にずっと曝され安心して満足に城の中を歩く事も出来ないでいたのだ、そりゃあ怒りたくもなる

「……………嫌い……………」

自分でも馬鹿な事をした事を判っているのかそう一言述べるだけでそれ以上何も言い返して来ない魔王  
一方で



「…………お兄ちゃまにはかかっていわれるならほんもつれふ…………」

全く違う反応を示す人（変態）が此処に一人…………完全にキャラ崩壊してますよ？

自分の兄に若干蔑むような視線を向けられて落ち込む処が寧ろ喜んでるそぶりさえ見せる勇者妹クレアちゃん

今までの駆け引きで判りきっていた事だが、このブラコンぶりは完全に末期である

つてか別の何かにも目覚めつつある彼女の言葉に怒りよりも兄として妹の将来が不安になってきた。

にしても、この二人は…………

病人が居るのにも関わらず、こんな大掛かりなケンカをするなんて…………

クリスが結界を張っていたから良かったもののそうでなければ治療室は三回程消し飛んでいただろう、  
最も彼が対処する事を予め予想した上で遠慮無くケンカをしていたのかもしれないが、それでもやり過ぎな感じは否めない。

なんでこう血の気が多いのか…………

…………まあ、本気を出さなかっただけでもよしとしよう…………

この二人が本気を出したら

この城が消滅するだけでは収まらないだろうから…………

「…………風呂に……入るか」

流石に汗まみれで、身体に服が張り付いて気持ち悪くて敵わないと風呂に向かおうと魔王が立ち上がるがそれを聞いたクレアが肩からむんずとつかみ掛かり

「何言ってるの？先に入るのはわたし！」

と魔王の風呂行きを阻止する

……つかみ掛かっている限り自分自身も風呂に入れない事を知ってか知らずか……

「このっ…城の主は俺だぞ！！」

魔王はそんな妨害に屈せずにクレアを引きずり足を進める  
また飽きもせずにもまたケンカをおっぱじめようと二人  
あれだけ暴れておいて、いったいその元気は何処からやって来るの  
だろうか

勇者はため息をついて言った。

「……………一緒に入れば？」

見兼ねた勇者がそんな事を二人に呟いたのだが、それを聞いた途端、まるで鏡に映したように全く同じ仕種で両の眉毛を吊り上げて。

「誰がこんな奴と！！！！」

完全に台詞をハモらせて叫び声を上げる二人、実はこの二人仲がい  
いんじゃないのか？等と考えるが間違っても口には出さない  
そんな事をして火に油を注ぐだけだ。

女って面倒臭いのな……………

勇者クリスはそんな事を心の中で思った。

## 28、お祭りの話が来ました

「……………ふう……………」

生かしてやった恩を忘れてこっちに牙を向ける等と無礼な奴だ……………  
こっちも大人気なく安い挑発に乗ってしまったものだ。

「魔王様、入って宜しいでしょうか」

いつもの三馬鹿でも勇者兄妹でも無い声が執務室の前から聞こえてきた。

「……………?……………誰だ」

この城の住人以外この部屋を訪れる奴は居ないはずだが……………

「宰相です」

……………ああ、そういえばこんな奴居たな  
登場回数が少な過ぎてすっかり忘れていた。書類の受け渡しはだいたい  
が郵送だからあまり会う必要も無いし……………  
何の用だろうか  
入室を促そうと自分の姿を見下ろして。

「……………いや、少し待て」

思わず声を張り上げてしまう所だった。

今、俺女じゃん

急いで詠唱して術式を展開し身体を魔王モードに切り替える

「……良いぞ」

「？失礼します」

不審に思いながら入ってきた宰相は手元の書類を魔王に渡し

差し出された書類に目を通して

ああ、もうそんな時期かと感慨深く思う

四年に一度の聖誕祭、

魔界の王であり異界の門番たる魔王が参加出来る数少ない行事だ

「それで、城を守る影武者ですが……今回もご自身で？」

「ああ」

通常、魔王は一秒たりとも城を離れる事があつてはならないのだが  
聖誕祭等の国をあげての重要なイベントの時に限っては、自分の魔  
力を載せたパペット（人形）に守護を任せて  
祭に参加できる事になっている

しかし、このパペットとは、生きた人から魂を抜いて作られる魂の  
抜けた残骸でありそれを苗代に自分の分身を作るモノのだが、あ  
まりその作り方が外道であり、尚且つ見た目がエグイので

魔王は自身の影から擬似生命を作り出す事が出来るので祭時の時は

それを苗代にして分身を作っている

「準備が出来ましたら私めに声を」

「解った」

音もなく消えた宰相を確認して魔王はフツとため息をついた。

恐らく来るときも扉の前まで転移を使ったのだろう。

何にせよとつと帰ってくれて良かったとシミジミと思った。

グズグズと城に留まられてその間に、

勇者がこの部屋にやって来たりしたならば……最悪、勇者妹と出会っていたのなら衝突は避けられなかったはず、下手すれば宰相を一瞬で消し炭にしていたかもしれない

(ややこしい事にならなくて良かった…)

変身を解除して書類に目を通す。

この変身呪文はどんな姿にも変える事が出来るのが利点だが自身の魔力が大きすぎるためか、術がキャパシティオーバー気味で変身している間使える魔力が制限される上に時間をかけて固定化をしないと直ぐに解けてしまう。

おまけに術を解いた後異様に肩が凝る。

肩をコキコキさせながら書類に目を通し終えた魔王は

「さて……準備をするか」

椅子から立ち上がると、まるで見計らったかのように扉が開き、勇者が入ってきた。

「魔王……………飯」

そういえば、まだ昼飯を作っていないなかつたと相変わらず食い意地の張っている勇者の姿を見て、呆れるやら気が抜けるやら

「……………まずは飯か」

そういつて調理室へと向かった。

28、お祭りの話が来ました（後書き）

勇者の呼び方を実名ケリスにするか否か……



## 29、魔王つて……

現在、最早恒例行事の如く

食堂には城に居る全員が会して昼飯を食べていた。

敵対関係にあるはずの勇者と魔王とその部下が仲良く食卓を囲む様は今更ながらシユールと言わざるを得ない

しかも勇者はやる気無しの仏頂面少年

魔王はエプロンを付けた長い髪の麗らかな美人という事実がそのシユールさに拍車をかけている、

そして極めつけに勇者妹クレアが存在

今朝まで魔王の施しは受けないだの何だかんだ言っていたくせに食欲には勝てなかったのか育ち盛りに見合った量以上の量（軽く五人前）の料理を黙々と食べていた。

基本この城の住人は食欲旺盛で一回の食事はそれなりに量があるのだが流石にこの量を平らげるクレアの胃袋には驚きだ。

なんとも食い意地の張ったこと……

兄が兄なら妹も妹である……

髪の色が同じといえど性格が真逆の二人に

こいつら本当に兄妹なのか？と疑う気持ちはあったが

こうして、兄と同じく……いやそれ以上に食い意地が張っているのを見ると

……やっぱり兄妹なんだなとシミジミと感じてしまう……

兄妹は不思議なものだなあと

ラザニアをフオークで突きながら

魔王はそんな事を考えた

まあ実際は

“もうこの城……魔王城じゃ無いだろ”

という現実から逃避していただけなのだが……。

「……………はあ」

(別の勇者がそう何度も攻めて来るわけでも無いしな……………)

勇者が城にやって来る頻度は多くて月に一回少ないときは二年以上何も無い事もある。

そりゃ、勇者の魔界攻めなんて少ないに越したことはないのだが

完全に気の抜けきった雰囲気

ホントにこのままで良いのだろうか

エプロン(花柄)姿の魔王は歎いた。

「……………そういえば、さっきの話……………何だった?」

と勇者が聞いてきた。

聞いてたのか、と魔王は一瞬驚き

まあそうでなければあんなタイミング良く入って来れないなと納得し

「ああ、魔界の祭の首尾の打ち合わせみたいなものだ」

とぶっきらぼうに答えた。

祭？と勇者が聞き返すとラプラスが丁寧に説明してくれた。

混沌とした世界に秩序を授け魔界を作り上げた女神の誕生した日、それが四年に一度の廻り来る神の与えし日であり

その日は女神と魔王を讃え

魔界をあげての盛大な祭を行うのだと

「……………へえ……………」

それまで魔界は結束とかそういうものとは掛け離れた存在だと思っていたのだが

魔界にもそういう祭があるのかと感心したように声を上げた。

「滅多に無いお祭りだから準備が大変なのよ」

魔王が人前に出るという事はそれなりに大きな意味を持つ。

呼ばれて、ハイそうですかと

簡単に出席するというわけにはいかないのだ。

「でも祭の時の魔王さまはホントに格好良いんですよ！…！」

横からファフニールがやや興奮気味に言った。

「……とは言っても俺は高台の上から眺めるだけのお飾りなんだがな」

忌ま忌ましげにそう吐き捨てて後ろに倒れて背もたれに身体を預けた。

憂鬱な表情が顔に張り付いている

「また、そんな事言っ……祭の主役なんだからもつと堂々としてくださいよ」

マンティークがそう言うが。

「主役、か」

その言葉に自嘲的な笑みを浮かべた

「その祭……出られるか？」

不意にそんな事を言う勇者、

はるばる魔界と人界の境にまでやって来て今まで城の中以外を見たことのない勇者は魔物達の町に興味が沸いてきたのだ

「何を言うかと思えば……魔族の祭に人間なんぞ出たら面倒な事になるだろうが」

出られるわけないだろうと魔王が半ば呆れた目を向ける。

「そうか……………」

一般的に魔物が人間の敵であるように人間もまた魔物の敵である。そう、はいそれと出会って仲良くなる等ということは、まず有り得ない。

——（魔王の部下は別として）

目に入った途端大混乱に陥るのが関の山だ。

そう理解して予想していた返答とはいえ勇者は少し……………」

いや、物凄く残念そうに肩を落とした。そして、足をぶらぶらさせてふて腐れた。

（こついう時はあからさまに感情を表に出すんだな……………」

この勇者、顔は仏頂面で感情がわかりにくい変わりに、こつ言った行動での感情表現が妙に豊かなのだ。

お祭りに出たいと言つ盛りまだ子供というか……………」

15に届くか届かないかという少年に何を求めるんだという話になるのだが……………」

「ま、方法が無い訳ではないけどな……………」

「……………」

何やら、勇者の顔を見て頭を少し捻った後。

「銀狼族フェンリルあたりが妥当か？」

そういつて手を翳した。

すると魔力の粒子が勇者に纏わり付き

それと同時に耳が尖り毛が生え頭頂部に移動し、犬歯が鋭く延び始める

数秒もすると

まあ見事な獣人がそこに居た。

「具合はどうだ？」

「なんか……………怠い……………な」いつものめんどくさそうな顔が余計けだるげな雰囲気を出している。

「無理矢理身体を作り替えてる訳だからなある程度の倦怠感是我慢しておけ」

要は人間だと判らなければいいのだから祭に出ても問題無いはず。  
とここで

コホン

と咳ばらいが一つ聞こえ見遣ってみれば

「お兄様が行くなら私も……………」

と今まで食事を終えて静観していたクレアが自ら頼み込んできた。

本人は魔界の祭なんか興味無いが兄が行くのなら私もついて行かない訳にはいかない!!………というところだろう

そっぴゃ、こいつも居たなと

げんなりとした

なんでコイツにまでやらんといけないのだと、魔王は正直いって勇者妹が嫌いだ

部下のラブラサスの言う事は素直に従うのに自分の言うことには何かと反発してくる

一体何の怨みがあつてそんな態度をとるのか………魔王は考えて

(………思い至ることが多すぎる)

魔族と人間だからそれが普通なのだけど

自分の事を思いっきり敵対視している奴に温情をかけるつもりは無いが

無視したら後々面倒な事になるんだろうなと考えながら勇者妹を見つめる。

「………レッドデーモン紅魔族だな」

「な」相手の反論を聞く間もなく魔王が面倒臭げに手を振ると勇者妹の頭に二本の角、背中に紅い羽根がニョキりと生えた。髪にも紅いラインが数本入る。

ギャーッ!!

と頭を押さえながら悲鳴を上げるクレア

「な、なんで私がこんな……………」

レッドデーモンは人間界では高位魔族故に体力魔力知能共に高いが直情的で怒りやすく肝心な時に頭の回らない残念な魔物として有名なのだ。

そんな魔物に姿を変えられるなど屈辱以外のなにものでも無い

「この外道！！早くこの姿を解け！！」

魔王はニヤリと笑い

「解いてやつても良いが、そうするとお前一人ここで留守番になるがそれでも良いのか？」

因みに魔王は術をかけ直すつもりは全くない。

体型を変えている訳ではないから自身にかけているものよりも楽にかけられるのだが、とはいえそれでも魔力の高いこの二人に術をかけるには外見を少し弄るだけでもかなりの魔力を消費する、わざわざ二度手間をとる必要があるだろうか？

「う、……………なら」

「実力行使か？言うておくが、これでも好意でやっているんだぞ？」

この姿は屈辱的だが、兄と離れ離れになるのは堪えられないし足手まとい等以っての外だ



「……………」

今にも魔王を殺さんとする視線がギラギラと光った、しかし当の本人はどこ吹く風か全く気にしていない。

「……………！」

根負けしたクレアは半ベソかいてどこかへと走り去っていった。

「ねえ、魔王様変えてあげたら？」

見兼ねてラプρασスが声を潜めて言うが

「は、何を選んだ所で同じ事だろ」と鼻で笑って全く取り合わない。

これが原因で暴れられたらいったいどうするのだろうか……………。

「……………安心しろ、祭に行ったらどうせ機嫌が良くなる」

「?」

そんな事を言う魔王の考えが汲み取れずラプρασスは首を傾けた。

「クレアちゃん大丈夫ですかね……………」

ファフニールも、いましがた走り去っていったクレアを心配しているが

「大丈夫だろ放っておけ」

あくまでも突き放した言い方だ

「さて……んじゃ俺は今日から準備があるから、そろそろ行くぞ……  
…祭について知りたければそいつらに聞け、俺よりよっぽど詳しい  
だろうからな」

「あ……」

勇者が何か声をかけようとしたがその言葉には気づかず

はあ、面倒臭い……

などと、ぶつぶつと言いながら執務室へと向かって行ってしまった。

エプロンをつけっぱなしのまま……

29、魔王つて……（後書き）

相変わらずの遅筆&amp;下手な文章。まあ……こんな下手な奴でも小説書けるんだと小説書く活力の素にして頂ければ光栄です。

30、なんかお祭りだそうですね。

そして来たる祭の当日

道の脇に様々な屋台が立ち並び

ある者は魔界の祭とて人間の祭となんら変わりはない。

ある者は家族で、またある者は友人と、またある者は恋人と  
しかし、様々な人（？）がごった返し祭を楽しむ雰囲気の中

とてつもない負のオーラを放つ少女が一人居た。

……つまり……勇者妹さんは非常にイライラしていた。

魔王にこんな姿にされて丸二日、

不本意ながらも兄のためと必死に堪えていた彼女の堪忍袋の緒も流  
石にそろそろ限界だった。額にビキビキと青筋を作り、ふとしたこ  
とでブチ切れそうだ。

しかも耳をすませば

一殺す殺す殺す一

とブツブツと小さく呪詛の音が聞こえる。どうにか勇者が側に居て、  
未だ被害は出ていないが、最早それも時間の問題だろう

（（気まずい……））

意地を張らずに他の姿にしてくれれば良いものを……

今はこの場に居ない魔王をただ怨んだ

「あ、あの……折角来たんですから焼き菓子買いませんか？」

少しでも状況を良くしようと思っただ、屋台を指差しファーが少  
控えめに提案した。

「そ、そうね」

正直、食べ物ぐらいでクレアの機嫌が治るとは到底思えないが、何  
もしないよりはマシかと、それにラーサが同意し

勇者が宥めている怒れる獅子、クレアを連れて屋台の前へと向かっ  
た。

「おや、こりゃ珍しい集まりだ」

第一声はこんな感じ

店の前に来るなり、店主は少し驚いた声を上げた。

まあ、それは無理もない

揃いも揃って人前に出てくる事の少ない魔族が一同に会しているの  
だからそりゃあ驚きたくもなる

問題はその後だ、店主は何を思ったのかクレアをじっ見て

「……………レッドデーモンねえ……………」

と呟いた。

クレアの眉間がピクリと動く

(ちょ、何で今それを!!! って…わ!!!)

クレアを見てマンティが冷や汗を滝のように流しめちやくちや焦り  
始めた。

……………なぜならクレアの手に強力に魔力が収束していたのだから  
それに気づいたその他三人も続けざまに慌て始めたのは言うまでも

ない

このまま言葉を続けさせたら店主の命が危ない！

「うーん、……………あ」

しかし店主は無謀にも尚も言葉を続けようとしている……！いますぐに口を黙らせたがそれは叶わない。

(こ、これ以上下手な事言ってくれないでえ……！)  
ラーサがそう祈っていると

「白狼と相性が良いって聞いたけど、隣の兄ちゃんはもしかして恋人かい？」

ピタ、とクレアの動きが止まった

そして次の瞬間に現れたのは……………

「そうなんですよ」

デレデレと顔を赤らめ頬を緩め素晴らしい笑顔を浮かべるクレアの姿だった。

「……………ちが

「やっぱり！そつだと思つたよ！こつという祭はデートにはもつてこいだからね」

「……………だから違

「はい！前から話を聞いて来たいと思つていていたんです」

「……………ちよ

「へえ……！そりゃあ良い、じゃあ白狼の兄ちゃんは彼女をキツチリ

楽しませないとな」

「……………」

「いえ、寧ろ私が兄様を楽しませてあげます！！ね、兄様」

「……………いや、別に……………」

「なんだい、ハッキリしないなあ！！！」

「……………ふふふ……………恥ずかしがってるんですよ」

来る前はあれほど乗り気じゃなかったのに。今はそんなことを全く感じさせないぐらいにハキハキと目を輝かせている、この変わりようはいったい何なのだろうか……………

勇者の言葉と意志をを完全に無視して話を進めているクレアと屋台の店主

この、彼女の兄好きには

(魔王様が言っていたのはこの事だったのか……………)

恐らく魔王は事前情報でその事を知っていたのだろう、だからクレアが怒っても敢えて無視していたのか

「……………そんじゃ、三個おまけしといたから祭を楽しんで来いよ！！！」

「はい！！！」

そう言って兄を抱きしめるクレア

その顔には歓喜で満ち溢れている

一方まだ子供と言える年齢であるとはいえ、自分と齡の近い実の妹に恋人呼ばわりされ抱きしめられ、なんだか物凄く複雑な心境の勇者。

困惑した顔で三人に助けを求める視線を送るが………反応は無い。

クレアの異常な兄好きには同情するが、何はともあれクレアの機嫌は直ったのだ

わざわざ直ったクレアの機嫌を損ねるような危険を冒すつもりは毛頭無いらしい。

楽しく祭を過ごすために……

勇者には悪いがここでイケニエになって戴く事が三人の中で決定した。

祭を楽しむ事数刻……

それぞれが祭を楽しみ

クレアのテンションは上げ上げで、それに反比例するかの如く勇者が疲弊し始めた頃

天幕の辺りが騒がしくなりはじめた。

「…あ、魔王様が出ますよ」

ファーが告げると……



国民の声援を一身に受けて、天幕の下から威厳を放ちながら魔王が現れた。

魔王の謁見である。

普段は魔王城に籠りきりの魔王はこの祭に限っては国民の前に姿を現し国民を祝福する、ある意味祭の主役、要だ。

この場に魔王が居ないのはそのため。

しかし……あんな所に一日中座らされ、ある種の見世物にされ、その様子を只見るだけというのはさぞ退屈だろうなと勇者は思い……少し申し訳無い気持ちになった。

自分達だけで楽しんでよかったのか？

そんな折……

「はぁ……お前達、騒ぎすぎだ」

そんな言葉と共に背後から現れたのは……魔王（女v r）だった。突然現れた有り得ない人物の出現にその場の全員が驚きの余り固まったのは言うまでもない。

一番早く状態を脱却したラプラスが天幕の下の魔王とこの場の魔王を交互に指差し

「あれ、魔王様？……でも向こうにはちゃんと……」

天幕の下にはキチンと魔王の姿をして佇む魔王の姿が見える。

「ああ、あつちに居るのはオレの分身だ、」

どうやら向こうは分身で、ワザワザ分身を作ってまでしてこっちにやって来たらしい。

「でもなんでこっちに？」

「こんな猛獣を放し飼いにしておける訳無いだろうが、変な事してないか心配して来てみれば……案の定というか……ただでさえ自立つんだから自重しろ。」

辺りを見渡せば確かに言われた通り多方面から感じる複数の視線、集団自体が珍しい事も有るが、兄への愛を遺憾無く発揮していたクレアの行動がいつの間にか視線を集めていたのだろう。

「まあ、まだ問題起こして無いだけマシか……」

頭を押さえて言った。

つまり、祭にやって来た五人の様子が気になってやって来たのだ。何か問題を起こしてはいないか、心配だったのだろう。

その姿は魔王というより出来の悪い兄弟に頭を悩ませるところのお姉さんである

それに気に食わないのは例の如くクレア

「なによ！それじゃあ私が馬鹿みたいじゃない」

「おお、まさにそれが言いたかったんだ」  
「っ！！……んですって！！！」

魔王とクレアの間にはバチバチと火花が飛び散った。  
やはり、魔王と勇者（妹）は相容れない存在らしい

「魔王様〜ノリが悪いですよ、こんなに周りが盛り上がってるのに  
一人冷めてると逆にバカっぽく見えますよ？」

「なっ…ばかだと？」

「祭なんですから騒がなかや損ですよ」

「踊るも馬鹿、踊らぬも馬鹿なら踊らにや損っスよ」

「……そういうものなのか？」

祭という物に慣れない為か  
見事に丸め込まれています。

「あ、ちょうどあそこに的屋があるからやってみませんか？」

移動するのを空気銃で打ち倒し、点数を競うゲームだ

「調度良いわ、どちらが上かわからせてやる……勝負よ！！！」

ズビシ！！！！

と効果音が流れたかどうかは定かではないが、クレアは流れに乗り  
魔王を指差し宣戦布告した。

一瞬驚いた顔をした魔王だったが……

「ふん、余興程度には付き合っただろうか」

魔王はニヤリと笑い勝負を引き受けた。

「…っんの余裕面、ぶちのめしてやる」

クレアはギリリと歯を鳴らした。

バシユバシユ、

ジャコツ

バシユ

ジャコツ

魔王とクレアの戦いは熾烈を極めていた。

装丁音と銃声が辺りに響き渡り周りの視線を集める。

最高得点をたたき出している二人は未だ手を休める様子はない

一進一退の勝負に周りは息を飲む。

魔王を追い越す事に躍起になっているクレア……魔王も目立つな  
という言葉は何処へやら完全に熱中してしまい周りの声が聞こえて  
いない。

魔王とクレアの勝負が白熱し

何だかいつの間にか輪の外に取り残された勇者は原材料名不明の何  
だか良く解らないジューズをズビビと啜った。

「ねえ、ちよつと良いかしら」

横から声をかけてきたのはラプラスだ

「？」

「ありがとうね」

突然礼を言われて余計に混乱する勇者  
それに気づいたのか言葉を付け加える。

「貴方が来てから魔王様ったら随分と楽しそうにみえるから」

「……そう……か？」

「貴方が来るまで魔王様は毎日つまらなそうにしていたのよ？」

勇者がやって来る以前の事を振り返って言葉を続ける。

「せっかくコッチが笑わせようと努力したけど全然効果が無かったの、でも貴方が来てから随分表情が豊かになって……だから本当に感謝している」

いつもふざけた感じのラプラスから

真顔でそんな事を言われて何と返して良いのか一瞬戸惑い。

「……別に……好きにしているだけ」

何も特別な事をした覚えは無いと勇者は言った。

「ふふ、それで良いのよ、これからも魔王様の事を宜しくね」

そういって彼女はクスリと笑った。

30、なんかお祭りだそうです。(後書き)

更新が久しぶり過ぎて誰も覚えてないよ!!ってなぐらい久しぶりの更新。次の更新は多分三月以降になります。

### 31、路地裏で無双

台を間に挟み向かい合う美少女が二人…

そしてその間を流星の如く行き来する純白の球体

カカカカカッ、

「死ね死ね死ね！！死ねええ！！！！」

「ふん、」

魔王とクレアの戦いは……………

何故か卓球という新たな舞台で火花を散らせていた。

何故祭で卓球？と思うかもしれないが

魔界では一般的な祭の遊戯らしい

音速を越えるスピードで火の粉を散らし魔王とクレアの間を行き来する球の様子は一般人には視認する事すら出来ない

クレアが魔王にストレートを打ち

かと思えば魔王は開いた間に素早く返す



さらにクレアは魔王に向けて一撃、かと思えばカーブでフェイントを狙う

しかしそれを難無く打ち返せば弧をかいって同じカーブで返って来るそこを全力の力で打ち返し通常なら反応出来ないほどの剛速球を繰り出す……………が

それを難無く台に戻し且つ球に回転を加える

一瞬反応に遅れるモノの辛うじて球を打ち返す

正に一進一退の攻防

球が何百回二人の間を行き来しただろうか……………

クレアがここで勝負と台の端ギリギリを狙い力の限り打ち込む

それを素早く反応した魔王が返したか……………と思えば再び端っこギリギリの全力スマッシュ

流石の魔王もこれには当てるのがギリギリであり

さらに止めと言わんばかりにクレアが力を込めて返したパワーショットは……………

寸手の所で台から外れ明後日の方向へと

魔王に点が入った。

「クツクツがあああ！！！」

あまりの事に口調がとんでもなく下品になっているクレア

「これでオレの43勝だなあ？ん？」

これまでの全ての戦いをまとめると魔王とクレアの戦いは魔王の43勝37敗12引き分けとなった。

よくもこの短い時間で百近い対戦が出来たモノである。

このリザルトは

ほぼ互角と言っても良い結果だが……

完全に自分が勝っていないと気が済まないクレアはこの結果に納得いくわけがない

それに加えてあからさまに見下したような魔王の言い方もカンに障り……

「……殺す殺す、クロスクロスゴロス」

危ない言葉を連呼し

完全にブチ切れ暴走直前クレア

するとクレアの頭にポスツと軽い衝撃の後、頭を撫でる心地の良い感覚がやって来た。

「……………クレア」

見上げてみれば怒りに身を任せそうになっていたクレアに見兼ねた勇者が若干の苦笑いを含ませながらも優しくクレアの頭を撫でていた。

「おにいひゃま〜」

これはクレアには効果抜群であり

5秒もすると般若のように恐ろしいほど強張らせていた顔は緩み切

り、子猫のようにスリスリとほお擦りを始め、完全に腑抜けになつてしまった。

流石に付き合いの長い兄妹だけに妹の扱いには慣れているようだ。妹を優しく制し

優しい眼差しを向ける勇者はやっぱりクレアの兄なんだと思う

ほのぼのとそんな事を思った一行は

「それじゃあ次はどこいきましょうか？」

と魔王に声をかけようとして

「あれ？」

しかし、視線の先に魔王は居ない

魔王はいつの間にか隣から姿を消していた。

「迷った！」

誰、という訳でもなく言い放った魔王は今正に絶賛迷子中の身である

ふと目に留まった屋台にフラリと立ち寄ろうと思ひ足を踏み出せば見事に人の波に流されてこの様だ

……魔王の筋力自体は魔力の強化が無ければ普通の女性に毛が生えたの程度

成す統べもなく流され続けて十数分

ようやく少し流れが収まってきた所で

先程までは流れに逆らって元居た場所を目指し、勇者達を探してい

たのだが、いくら時間をかけて大通りをうろろしても、全く見つからない上に、絶えず人がぶつかってきて不快な事この上ないため  
今現在、人が減るまで、と路地裏近くに避難していた。

「……………」

しかし、祭は始まったばかり人は減るところかどんどん増えていく  
このままジツとしているのは何か落ち着かない魔王

「ああ！ーもうじれったい！ー！」

耐え兼ねて声を上げると特に考えもなく路地裏へと足を進めてしま  
った。

……それが明らかに迷子になる子供の思考回路である事には全く気  
付いていない魔王であった。

「よおーっ、こんな所で何やってんだ？ゲヘッ」

暫く進むと妙に柄の悪い目のいつちゃってる獣系の魔族の男に遭遇、  
魔王に声をかけてきた……なんと期待に漏れずお約束な展開だ

「……………」

「なあ、俺と遊んでこうぜ？良いだろう？な？」

下品な目でなめ回すように見つめてくる男は気持ち悪い事この上ない

「……………何故、オレが名前も知らんヤツと遊ばなければならぬ？」

不快感に眉をひそめ、何だか少し的外したと言うと

「そつツレナイ事を言ってくれるな……………ヨ!!!!!!」

突然懐から取り出された銀色の物体を魔王は素早く避ける

見れば手には、よく切れそうな鋭利なナイフが握られていた。

男は最近この辺りを賑わせている路地裏の通り魔だった……………

彼は美女を切り刻む事に快感、生きがいを持つ即ち変態である

そのやり方は極めて陰湿であり

最初に襲った時点で喉を切り裂き声を出せなくした後、人目の着か

ない建物に閉じ込め生かさず殺さずいたぶった後に道に放り出すのだ

今のところ死者は出ていないが

何人も魔族の女性が身体と心に大きな傷を負い多くが泣き寝入り

をしていた。

「ひひひ……………怖いか？怖いだろ？いいんだぜ悲鳴をあげ……………」

通り魔はこれまでと同じように魔王を襲おうとした。

ベキヨッ

しかし……………うん。

今回は相手が悪かったとしか言いようがない……………

魔物の王とも呼べる魔王にとって

路地裏の通り魔などドラ エのスラムにすら満たない存在であっ

た。

長々と言葉を続けようとした通り魔は

「へ……………」

魔王の影に潰されてぐうの音をあげる間もなくペシャンコのサンドウィッチになってしまった。

辛うじて息が残っているのは魔王の慈悲故

「……ったく何なんだ」

魔王からしたら訳の解らない言葉をかけられた上にいきなり襲われて、たいそうご立腹である。

「特に目立つような事をした覚えも無いのに何故、襲われなければならぬのか理解に苦むな……と

先程祭で大活躍していた事などすっかり頭の中から消し去っている魔王。

ま、そうでなくても今現在、魔王自身が結構な美女である事実が他人の目を引いている事を本人は全く自覚していなかったし気づくはずもなかった。

その後も……

「けけけ、いい女じゃねーか」

バキッ

「金目の物を置いていけ!!」

バガッ

「おー可愛い娘発見」

「何〜迷子ちゃん？」

「お兄さん達が道案内してあげるよ〜」

ズゴツ  
バコツ  
ドコツ

「キーツキツキ……悪いですが商品にry」

ゲキョ

「は」

バスコツ………

略

「あの、道を……」

パコン

「ん？」

罪のない一般人を潰した辺りで

魔王はふと振り返った

魔王が来た道に続くのは魔王に挑んで軽やかに散って逝った勇者達

+ の山

驚きのエンカウント率である

顔色変えずに襲撃者を八工のように潰していく魔王にあえて立ち向かう彼等は勇敢なのかただの馬鹿なのか……

少しやり過ぎたか？と思いつつも

「……………まあ良いか」

魔王は特に気にすることなくその場を去って行った。

後日、祭会場周辺の治安が異常に良くなったとかならなかったとか。



### 31、路地裏で無双（後書き）

思ったよりも早く投稿出来た……………ぜ  
しかし、やはり遅筆な事には変わり無い

32、魔王が黄昏れました。(前書き)

最早誰も見てないよ!!とは思いつつも投稿。初期稿とは全然展開が違ってしまった……、いや、バトルとかホントに無理です。

### 32、魔王が黄昏れました。

「ああ！もう……………魔王様つたらいっただい何処に居るの？」

果てしなく続く人（魔族）の波を眺めて  
ラーサはウンザリといった様子で眺めた。

「まさかいきなり逸れるなんて思ってもみませんでしたね……………」

フアーもゲツソリとした顔でつられて思わず溜息をつく。

魔王部下&勇者一行は今現在、疎らに散らばる祭の群衆の中を右へ  
左へと流れながら魔王の姿を目下搜索中である。

……………雑談しながら歩いている最中ふと一瞬、目を離れた隙に魔王が  
いなくなったのが一時間程前の事だ

つい数十秒前まで隣に居たのに、まさか話している間のほんの僅か  
な一瞬の間で見失うとは思ってもみなかった彼等だが  
しかし、まさか魔王が道に迷うなんてあるわけないよな…と、迷っ  
たとしてもまさか宛てもなく歩き回るなんて馬鹿な事をするとは夢  
にも思わず

直ぐに戻って来るだろうとタカを括り、来た道を少し戻った所で周  
りを見渡しながら魔王が現れるのを悠々と待っていたわけだ……………

……………

が

……それから待つこと30分……幾ら待てど暮らせど全くもって一向に戻ってくる気配が無い

おかしいと思い直ぐさま魔力を探ってみれば魔王の反応がこの近辺に存在しない事が発覚する

流石に鈍い彼等もそろそろ気づき始めた、  
もしかして魔王……迷子なんじゃね？  
と

---

そして今に至る

「ったく、人を散々コケにしておいて自分は迷子かよ」

開口早々あまりお上品とは言い難い言葉遣いのクレア……相当イラついている

「……クレア……口が悪い」

「でも、お兄様！！アイツのせいでロクに祭を楽しめやしないうですよ……！」

何と言うか……

来る前はあまり乗り気ではないような事を言っていたのにすっかり遊ぶ気満々だったらしい。

「あー……」

「なら……私だけで捜して後から合流しましょうか？」

気を使ったファーが提案するが

「いえ、私も捜しますよ」

意外にも一緒に捜すと言うクレア

「あまり気を使わなくても……」

「あのポケナスには会って一言言わないと気が済まないので……ふふふ」

「……………」

そういうことかと押し黙る一行

クレアの背景にはゴウゴウと火が上がっている、今クレアの頭の中では“もし見つかったらどんな罵声を浴びかけてやるのか”と様々な思考を巡らせているのだろう。

文句を言い、黒い笑みを浮かべながらもその顔はとても楽しそうだ何だかんだ言っただけの仲の良い魔王と勇者（妹）、本人が聞いたら即座に“それはない！！”と全力で否定するだろうが……

---

「つかしいなー、ここいらに居るはずなんすけど……」

更に歩き回る事40分

漸く魔王の魔力の反応の強いポイントを見つけた彼等だが相変わらずその姿を見付けられずにいた。

「これだけの人が居るとやっぱり正確な場所の特定は無理ですしね……」

魔力の探知は臭いをかき分けるようなものだ、これだけの人が居ると人の波に流されて

「ここからは手分けして捜すしか無いみたい……」

やはりこうなるかと

「んじゃファーとクレアちゃんは此処で待つてなよ勇者つちとラーサの三人でこの辺り捜しておくからさ」

マンティが言うのとクレアが若干不満げに顔を膨らませたが勇者が彼女を宥め、結局三人で手分けして魔王を捜す事になった。

「……………」

しかし、捜せど捜せど魔王は見つからない

気配はあれど姿は無し、近くに居ることは判つても一向に姿を確認することは出来ない、一体何処へと消えたのか……

ふと勇者は空を見上げた……

「……………魔王」

高台に座り込み一人黄昏れている魔王に  
勇者は声をかけた。

「ん、ああ勇者じゃないか」

隣には食いかけの串焼きが放置されていた。

「……………何やってる？」

「いや、別に何も」

ふと言葉を止めて……………

「……………オレは、こんな所に居て良いんだろうかってね」

魔王は独白を始めた。

「魔王は……………本来城を一步たりとも出てはいけなはずなんだ……………  
…それなのに公務ほっぽり出してこんな所に居ていい訳無い……………」

魔王は魔界の守護神であり最後に最強の砦だ、魔王がそれを放り出す事は本来許されてはならない。

「それに、魔王が呑気に祭を楽しむんざ……………場違いにも程がある

だろ」

一人になってナイーブになったのだろう、自嘲気味にそんな事を言  
った。

「……………別に、そんな事は無い」

は、と魔王が顔を見上げると  
ひょいと串焼きをつまみ上げながら勇者は続けた。

「……………何かを楽しむのに場違いとかそんなのは関係ない、……………ちが  
うか？」

柄にも無く口が達者な勇者に  
魔王は一瞬鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしていたが

「……………ふふ、それもそうだな」

晴れやかな顔でそう答えた。

---

「ゴルア！！！！お兄様から離れやがれ！！このアンポンタン！！」

絶叫と共に現れたのは勇者妹クレアちゃんである、どうこの場所を  
嗅ぎ付けたのか

勇者の隣に座る魔王に怒りの形相で蹴りをかまそうとしていた。

「うわ?!」



とっさに近くに居た勇者を引っつかみ盾にしてしまう魔王

「……へ？」

「「あ」「

バゴン！！という爆音と共に吹っ飛んで行く勇者、そして勢いを殺し切れずに巻き込まれる魔王

「お、お兄様！！！？？？」

ドボン、と大きな水しぶきを上げて

魔王と勇者は二人仲良く落下地点の噴水に飛び込んでいった。

「……っ痛ー…いきなり何すんだあの女は、思わず勇者を盾に使っちゃまったじゃないか……」

「……きゅー……」

魔王を見付けたただけなのに随分と災難な勇者、……だが本当の災難はこれからであった。

「ん？」

魔王の胸の上に銀色の物体

何かと考えを巡らせるが、その正体に気が付き顔が徐々に赤くなっ  
ていく魔王

年齢不詳の魔王だが今の見た目は二十歳前の少女とそう変わらない、

その見た目の年齢に対しては随分と小振りな……しかし、しっかりと存在する二つの女性の象徴  
それに顔を埋める勇者

「うっ…なうななにゃ、うみゃああああ…!!!」

「……んあ？」

バボツ!!!

意識を完全に回復する間もなく、何が起きたか状況を掴む暇すら与えられず意味不明な言語を発する魔王に至近距離で全力のアツパーカットを喰らわせられ自動車が正面衝突したような音を立てて吹っ飛ぶ勇者……  
そして更には……

「お、お兄様の……」

勇者が魔王の胸に顔を埋める様をまざまざと見てしまったクレアが顔を真っ赤にしながら複数の魔法陣を展開

「不潔うっ!!!!!!」

既に瀕死の勇者に止めを刺すよう容赦無く無数の光の刃が向かっていった……。

その日、魔王&a m p・勇者妹の見事な連携技により勇者は祭の空を舞った。

33、逆ギレだ……と？（前書き）

今回は早めに書けた……ぜ。

次回もこれぐらいの早さで書ければ良いのに……

33、逆ギレだ……と？

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「お……おい……大丈夫か勇者、」

三人が勇者達の元にたどり着いたとき、  
まず目に入ったのはボロ雑巾になって横たわる勇者とそれに回復魔法をかけ続けるクリアに、ユラユラと遠慮がちに揺らし、揺り起こそうとする魔王の姿だった。

「ど、どうしたんですか勇者さん!？」

真っ青というか真っ赤というか……

出血多量で血まみれ&顔面蒼白、恐らく数十ヶ所骨折して現在進行形で死線を漂っている勇者の姿にファーが声を上げる。

並々ならぬ強さを持つ勇者が完膚なきまでにボロボロになっている様を見て

信じられない!!といった様子でラーサとマンティが、何があったのか聞こうと二人に顔を向けるが……

何故かサツと気まずそうに顔を背けるクリアと魔王……

「……………」

その様子で“ああ、あんたらがやったんかい”と即座に理解した勘の良い部下達であった。

「なにやったの?クリアちゃん……………」

呆れたような声で改めて何が起こったのかを恐る恐る尋ねるラーサ。

「いや……あの………違うんです、これは不可抗力というか………」

モゾモゾと言いくそくに話し始めたクレアだが、

「へ、魔法弾数十発ぶち込んでおいてよく言うよ」

と魔王の人を小馬鹿にしたような口ぶりにクレアはプツン

「んだ？じゃあ、無抵抗のお兄様を勢いに任せて殴り飛ばしたテーマはどうなんだよ？あ！？」

チンピラ口調で魔王をまくし立てると  
若干怯みながらも

「し、仕方がないだろうが！！それに、オレの身体に無断で触れてきたんだ……それなりの罰を……オレは悪くない！」

と反論、なんか開き直った

「謝れ！！兄様に全力で謝れええ！！」

魔王につかみ掛かり、物凄い顔で迫るクレア

「何でオレがコイツに謝らにゃいけないのだ！！」

それにまけじと凄む魔王

火花を散らし言い争う二人は取っ組み合い喧嘩にまで発展しかけた

が……

「ちよ、勇者さんの顔がまた青く……」

治療魔法を中断したため顔からどんどん生気が消えていく勇者、もうすでに口から魂が殆ど抜けきっている。

「わわわ！」

クレアが慌てて治療魔法をかけ直してみるものの勇者の生気は一向に良くならない

本格的に危篤状態に陥ってしまった。

数10分の治療の後、どうにか事なきを得たが……  
それを見て一言

「勇者つち、なんか……とんだ災難だったツスね……」

マンティが心の底から同情した。

ムスー

「……」

顎の粉碎骨折に内臓裂傷、全身打撲および出血多量、普通なら明らかに即死するであろうダメージだがクレアの勇者力による懸命な介護と自身の異常な生命力で漸く治療が終わり起き上がれるほどに回

復した勇者。

その勇者は縮こまっているクレアと魔王を目の前に並ばせて恨めしそくにジーンと見つめていた。

「……クレア……何か言うことは？」

普段あまり怒らない勇者が冷たく静かに怒りの炎を燃やす様子にクレアはたじたじだ。

「……ご、ごめんなさい……」

クレアは素直に自分の非を認めて頭を下げた。その様子に幾分満足した勇者は、今度は魔王に向き直り。

「……魔王」

「オ、オレは悪くないぞ！！」

「……」

なんとということだろう魔王は往生際が悪く尚も自分は悪くないと開き直って言い募り始めた。

「だ……だいたいお前が油断しているのが悪いんだ！」

「……」

「そもそも、こうなった原因もお前の妹が蹴りかましてきたからだし……オレに全く非は……」



「……」

魔王の殆ど開き直りとも取れる言い訳に勇者はただ黙って魔王を見つめていた。

「……」

「……」

ジトと

勇者はただ黙って魔王を見つめていた。

「わ、わ、悪かったよ！！だからそんな底冷えするような目で見んなー！！」

謝る魔王、しかし誠意の足りない謝罪に僅かながら眉を寄せて睨みつづける。

「……はあ」

暫く冷たい視線を送り続けていた勇者だが、魔王の背中に大量の冷や汗を流し出す頃。

結局は、怒りを通り越して、最早呆れて声も出ないといった感じで短くため息をついた。

「……で？」

「……で？」

「なんでこうなった」

「……は？」

「あー、確かにそれは気になったツスね、ってか勇者っちその場に居たのに判らないんスか？」

「何があつたんですか？」

「勇者ちゃんが何がしたの？」

それまで静観していた魔王の部下が勇者の質問をきっかけに詳しい話を聞こうと詰め寄る

「……クレアのけりに魔王と一緒にふんすいにおちたのはおぼえてる……」

そう、勇者が覚えているのは噴水に落ちた所までだ。その後意識が戻る前に二人のコンボ技を喰らったために、自分が何をしたか全く覚えていないし、そもそも知らなかった。

「お……おま、あんな事をしておいて覚えてない……だと？」

「……？あんなこと？」

自分が何をしたのか全く知らないため頭に疑問符を浮かべるばかりの勇者と、現場に居なかつた部下達。

「……なにかした？」

「……そっそれは……」

「……え、えーと……」

言い淀む魔王とクレア

当然、言える訳がない

まさか勇者が魔王のおっぱいに顔を埋めていたなんて恥ずかしくて言える訳がない。

「あ……う……え」

「どうしたんですか？」

「えと……」

「黙り込んでないで早く言ってくださいよー」

先を促されるも顔が赤くなるばかりで話す気配がない、そして何かに気づき、さりげなく距離を置くラーサ

「……クレア、魔王」

再度二人に何があつたか問いただそうとする勇者、二人の頭からは湯気が立ち上っているが気付いているのはラーサだけ

「「「い……」」」

「「「い？」」」

「「言えるわけあるかあああ！！！！！」」  
ボワツ！！！！

爆音と共に叫び声を上げた。

涙目で絶叫し逆ギレした二人の魔力の暴走により生じた衝撃波が勇者達を襲う

あまりの迫力に目を見開いてビビる勇者だが、なんとか吹き飛ばさ  
れずに踏み止まる事が出来た。

しかし、踏み止まれなかった人も居る訳で……………

怪我人が二人増えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3563m/>

---

魔王様は憂鬱だ!!!

2011年5月16日22時15分発行